

Backup ExecTM System Recovery 2010

Server Edition

クイックスタートガイド

NEC

改版履歷

[illegible]

商標について

Symantec、LiveUpdate、SmartSector、Backup Exec は、Symantec Corporation または同社の米国およびその他の国における関連会社の商標または登録商標です。

Microsoft、Windows、Windows Vista、Windows 7は米国Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

Windows 7 は、Windows 7 Starter operating system、Windows 7 Home Premium operating system、Windows 7 Professional operating system、Windows 7 Enterprise operating system および Windows 7 Ultimate operating system の略称です。Windows Server 2008 R2 は、Windows Server 2008 R2, Standard、Windows Server 2008 R2, Enterprise、およびWindows Server 2008 R2, Datacenter の略称です。Windows Server 2008 は、Windows Server 2008 Standard operating system および Windows Server 2008 Enterprise operating system の略称です。Windows Vista はMicrosoft Windows Vista Ultimate operating system, Microsoft Windows Vista Enterprise operating system, Microsoft Windows Vista Business operating system, Microsoft Windows Vista Premium operating system, Microsoft Windows Vista Home Basic operating system の略称です。Windows 2003 R2 はMicrosoft Windows Server 2003 R2, Standard Edition、Microsoft Windows Server 2003 R2, Enterprise Edition およびMicrosoft Windows Server 2003 R2, Datacenter Edition の略称です。Windows 2003 はMicrosoft Windows Server 2003, Standard Edition、Microsoft Windows Server2003, Enterprise Edition およびMicrosoft Windows Server2003, Datacenter Edition の略称です。Windows XP はMicrosoft Windows XP Home Edition および Microsoft Windows XP Professional の略称です。Windows 2000 はMicrosoft Windows 2000 Server operating system、Microsoft Windows 2000 Advanced Server operating system、およびMicrosoft Windows 2000 Professional operating system の略称です。

本書のサンプル画像などで使用している名称は、すべて架空のものです。実在する品名、団体名、個人名とは一切関係ありません。

記載の会社名および商品名は各社の商標または登録商標です。

ご注意

- (1) 本書の内容の一部または全部を無断転載することは禁止されています。
- (2) 本書の内容に関しては将来予告なしに変更することがあります。
- (3) NEC の許可なく複製・改変などを行うことはできません。
- (4) 本書の内容及び本書を使用した結果について明示的にも黙示的にも一切の保証を行いません。

© NEC Corporation 2011

はじめに

Backup Exec System Recovery はご購入頂いたお客様のご要求を満たすように最適化されていますが、より正しく製品をお使い頂くためにカスタマイズが必要になることがあります。ソフトウェアをインストールする前に、下記のリンクから製品の設定に関する重要な情報と重大な警告についてのドキュメントを参照してください。ドキュメントには製品がお客様の環境に合わせて適切に設定されているかどうかを確認する方法に関して詳細な情報が記載されています。なお、ドキュメントは英語のみで記載されている場合があります。 <http://seer.entsupport.symantec.com/docs/335863.htm>

本書は、**Backup Exec System Recovery 2010 Server Edition** を利用されるにあたり、事前に製品概要やインストール、利用方法についての概要を理解して頂くことを目的に記述されております。

詳細な機能や設定方法などにつきましては、ユーザーズガイドをご確認ください。ユーザーズガイドは、**Backup Exec System Recovery 2010 Server Edition** インストール CD-ROM の直下の **docs** フォルダ に格納されています。(ファイル名： **USERGUIDE_JA.PDF**)

目次

1	動作概要	1
1.1	主な製品コンポーネント	2
2	システム要件	3
3	リカバリディスクの検証	5
3.1	検証の準備	5
3.2	検証の実行	6
3.3	より確実なリストアのために	16
4	本書での取り扱い範囲	17
4.1	バックアップシナリオ	17
4.2	バックアップ環境	18
5	Backup Exec System Recovery のインストール	19
5.1	インストールのための準備	19
5.2	インストールの実行	19
6	バックアップ	27
6.1	コンピュータのスケジュールバックアップ	27
6.2	バックアップに関するアドバイス	39
7	リストア	40
7.1	システム全損時のコンピュータの復元	40
7.2	ファイルの復旧	54
8	注意制限事項	62
9	FAQ	64
10	障害時の問い合わせ方法	65
10.1	SeaSTログ採取方法	67
10.2	リカバリディスク起動時のSeaSTログ採取方法	71

1 動作概要

Backup Exec System Recovery 2010 は、Backup Exec System Recovery 8.5 の後継となるバージョンです。データもシステムも丸ごとバックアップし、障害時に簡単・高速にリストアすることにより、容易な障害復旧を実現します。これにより、ダウンタイムを抑え、業務継続を支援します。

バックアップは、スナップショットを利用するため、バックアップ処理中にも、コンピュータの機能を継続して実行することができます。バックアップは、お客様の運用に合わせてボリューム単位もしくはファイル・フォルダ単位を選択することができます。また、リカバリディスクを使用してのコールドバックアップにより、起動しなくなったシステムのデータを取り出す事もできます。

リストアは、ボリューム単位もしくはファイル単位で実行することができます。また、システムボリュームが障害により動作しなくなった場合にも、リカバリディスクを使用することで、短時間にシステムを復旧することができます。アプリケーションや各種設定もバックアップするため、OS やアプリケーションの再インストール、設定を行う必要はありません。

1.1 主な製品コンポーネント

Backup Exec System Recovery には、プログラム本体とリカバリディスクの 2 つのコンポーネントが含まれます。

主なコンポーネント	説明
Backup Exec System Recovery プログラム (ユーザーインターフェース)	Backup Exec System Recovery プログラムでは、コンピュータのバックアップを定義、スケジュール、実行できます。バックアップを実行すると、コンピュータのリカバリポイントが作成されます。このリカバリポイントを使用して、コンピュータ全体または個別のドライブ、ファイル、フォルダを修復できます。また、リカバリポイントの保存場所（バックアップ先）を管理したり、コンピュータのバックアップの状態を監視して、データが定期的にバックアップされていることを確認できます。
Symantec Recovery Disk CD (リカバリディスク)	リカバリディスク を使用すると、修復環境でコンピュータを起動できます。コンピュータのオペレーティングシステムが正常に起動しない場合、リカバリディスク を使用してシステムドライブ（オペレーティングシステムがインストールされているドライブ）を修復します。また、コールドバックアップにより、起動しなくなったシステムのデータを取り出す事もできます。 なお、リカバリディスク には、コンピュータに対応したネットワークとストレージデバイスのドライバが含まれている必要があります。事前に本書第 3 章「リカバリディスクの検証」を参照して、リカバリディスクから自身のディスク及び、リカバリポイント保存先にアクセス可能であるかを検証してください。もし、アクセスできなかった場合は、ユーザーズガイド 第 3 章の「カスタム Symantec Recovery Disk CD の作成」を参照して、お客様にてカスタムリカバリディスクを作成してください。

2 システム要件

◆ Backup Exec System Recovery 2010 Server Edition のシステム要件

項目	内容
OS	x86-32bit 版または x86-64bit 版 • Windows Server 2003 Enterprise/Standard/Cluster Node (SP2) ※1 • Windows Server 2003 R2 Enterprise/Standard/Cluster Node (SP2) ※1 • Windows Storage Server 2003 (SP2) • Windows Storage Server 2003 R2 (SP2) • Windows Server 2008 Datacenter/Enterprise/Standard/ WebEdition/Server Core (SP2) ※2 ※3 ※4 • Windows Server 2008 R2 Datacenter/Enterprise/Standard/ WebEdition/Server Core ※2 ※3 ※4 • Windows Storage Server 2008 (SP2) ※1 クラスタ環境でご使用していただくことは可能ですが、フェイルオーバーには対応しておりません。 ※2 Backup Exec System Recovery をインストールした他の装置から操作を行うためには、ファイアウォールの設定を変更する必要があります。詳しい情報については以下の URL を参照してください。 http://seer.entsupport.symantec.com/docs/294972.htm ※3 Windows 2008 Server Core では、ユーザーインターフェース無しの Backup Exec System Recovery エージェントのみローカルからインストールすることが出来ます。 ※4 各バージョンの Hyper-V 対応版も含む。
メモリ	各コンポーネントを実行するためには以下のサイズのメモリが必要です。 • Backup Exec System Recovery Agent : 512MB • Backup Exec System Recovery ユーザーインターフェースと Recovery Point Browser : 512MB

	リカバリディスク使用時には、 1GB 以上（ビデオカードなどが使用するメモリサイズを除く）のサイズのメモリが必要です。
ディスク	インストールするコンポーネントごとに以下の空き容量が必要です。 • Backup Exec System Recovery : 430 MB • Microsoft .NET Framework 2.0 : 280MB (x86-32bit)、610MB (x86-64bit)

3 リカバリディスクの検証

システムを復旧する場合は、リカバリディスクを使用して **Backup Exec System Recovery** を起動します。

リカバリディスクの中には、ディスクやネットワークを認識するためのいくつかのデバイスドライバが、あらかじめ格納されていますが、お客様の装置のストレージやネットワークに対応したドライバが格納されていない場合もあり、その場合には、お客様にてリカバリディスクのカスタマイズを行う必要があります。運用に先立って、リカバリディスクの検証を必ず実施してください。

3.1 検証の準備

以下を準備してください。

- リカバリディスク

リカバリポイントの格納先をネットワーク上の共有フォルダにする場合は、以下も準備してください。

- リカバリポイントを保存するための共有フォルダ
- リカバリポイントの保存先にアクセスするための、**LAN** ケーブルの接続。（複数のネットワークアダプタが存在する場合も 1 本だけ接続してください。）

3.2 検証の実行

以下の手順に従って、リカバリディスクの検証を行ってください。もし、検証でディスクやネットワークが認識できなかった場合は、ユーザーズガイド 第3章の「カスタム Symantec Recovery Disk CD の作成」を参照して、カスタムリカバリディスクを作成してください。作成したカスタムリカバリディスクも、以下の手順に従って検証を行い、ディスクやネットワークが認識できるようになったことを確認してください。

◆ 検証方法

1. リカバリディスク を光ディスクドライブにセットし、CD よりシステムを起動します。
2. 言語の設定画面が表示されますので、日本語を選択して **[OK]** ボタンをクリックします。選択しなかった場合は自動的に英語が選択され、以降の画面が英語での表示となりますが、メニュー画面起動後に改めて日本語を選択することも可能です。
3. **[エンドユーザー使用許諾契約]** 画面が表示されますので、使用許諾契約の条項を一読し、同意する場合は **[同意する]** ボタンをクリックします。
4. ネットワークサービス起動確認画面が表示されますので、**[はい]** ボタンをクリックします。10 秒間何も選択しなければ **[はい]** ボタンを選択したとみなし、自動的に次へ進みます。

このとき、ネットワーク自体に障害がないにもかかわらず「ネットワークアダプタを取得できません」のメッセージが表示される場合は、ご利用の装置のネットワークデバイスすべてについて、リカバリディスクにネットワークドライバが含まれていないことをあらわしています。この状態ではネットワーク上のリカバリポイントからの修復を行うことができませんので、必ずカスタムリカバリディスクを作成してください。メッセージ確認後、**[OK]** ボタンをクリックして画面を閉じてください。

カスタムリカバリディスクの検証時は、項番 4. でネットワークサービス起動確認画面は表示されません。カスタムリカバリディスクの作成時に、**[オプション]** 画面の **[ネットワークサービスを自動的に開始]** をチェックせずに作成した場合は、項番 12.、項番 15.、項番 17. のいずれかの操作後に表示されます。ネットワークサービス起動確認画面表示後は、**[はい]** ボタンをクリックしてください。

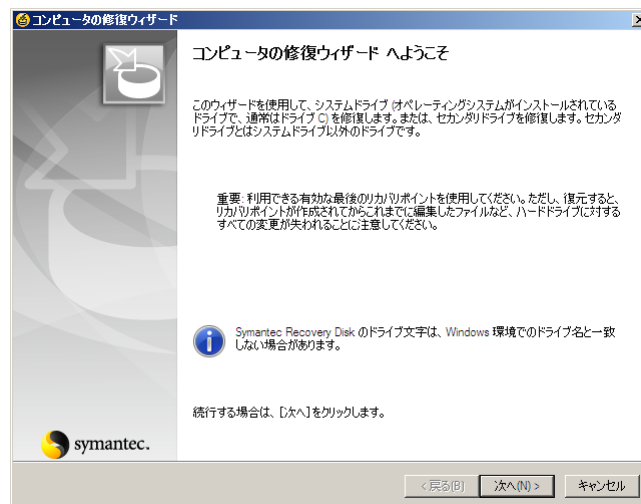
5. まずは、ストレージデバイスのドライブを確認するため、[ホーム] → [コンピュータを修復] をクリックします。



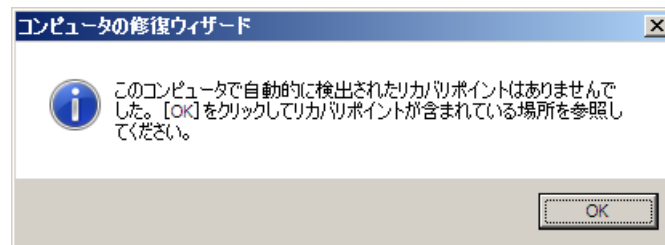
+++ 注意 +++

ここで、コンピュータのバックアップをクリックするとウィザードがフリーズする場合があります。間違ってクリックした場合は、フリーズしたウィザードは無視してウィザードの下に表示されているメニュー画面に戻り、[コンピュータの修復] をクリックして作業を続けてください。

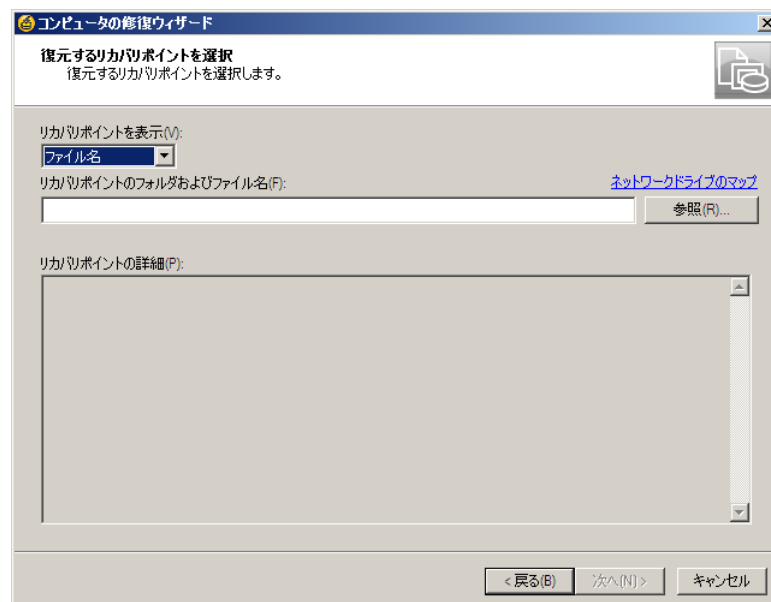
6. 以下の画面が表示されますので、[次へ] ボタンをクリックします。



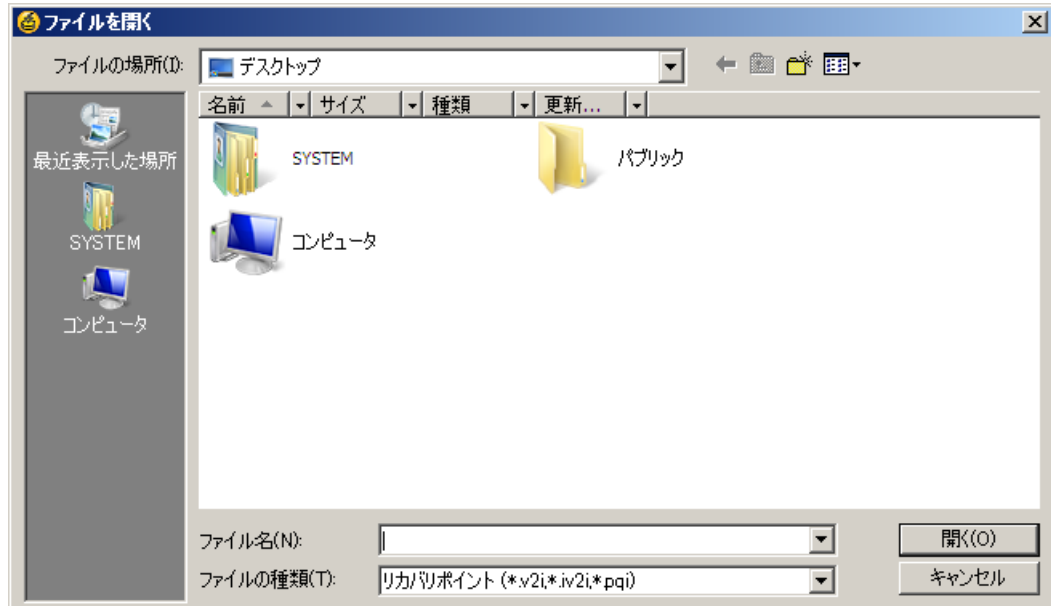
7. 以下の画面が表示された場合は、[OK] ボタンをクリックします。



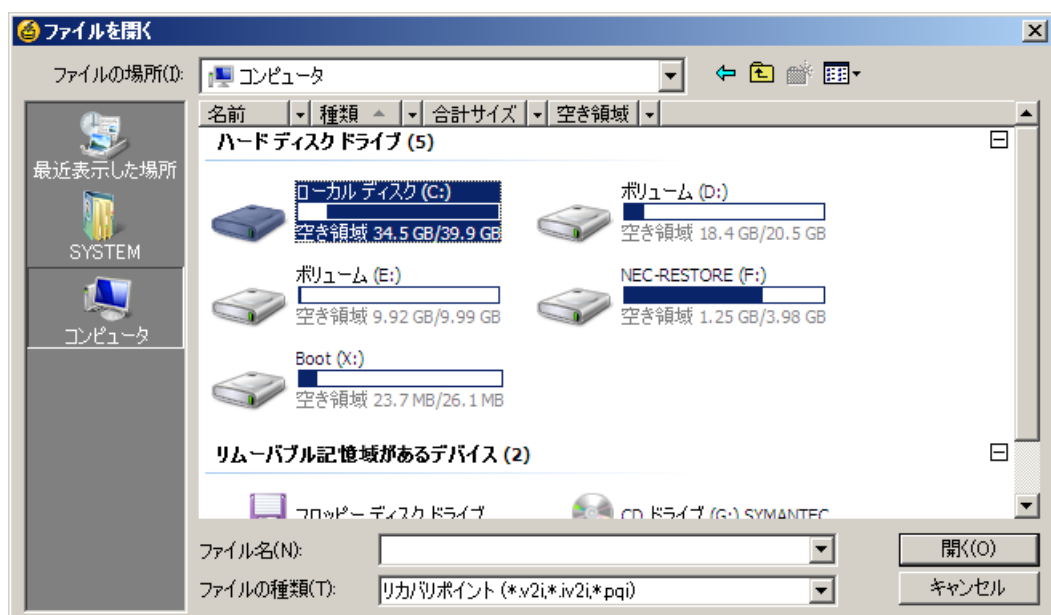
8. 以下の画面が表示されますので、[リカバリポイントを表示] 項目のプルダウンメニューで [ファイル名] を選択し、[参照] ボタンをクリックします。



9. [コンピュータ] をダブルクリックします。



10. 以下の画面で選択できるドライブにバックアップ・リストアの対象となる全てのローカルディスクや DVD、リムーバブルディスクが表示されていることを確認してください。例えば、**Boot(X:)** のみが表示されている場合には、リカバリディスクにストレージデバイスのドライブが含まれておらず、このままでは修復を行うことができませんので、必ずカスタムリカバリディスクを作成してください。



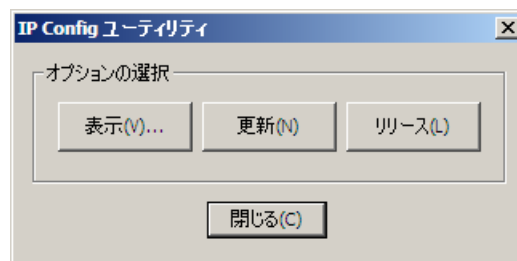
11. [キャンセル] ボタンをクリックして、項番 10.と項番 8.の画面を終了してください。リカバリポイントをローカルドライブに保存する場合は、ここで確認終了となりますので項番 22.に進みます。項番 4.で「ネットワークアダプタを取得できません」のメッセージが表示されている場合も、すでにネットワークデバイスのドライバがリカバリディスクに含まれていないことがわかっていますので確認は終了となります。項番 22.に進んでください。

ネットワーク上の共有フォルダにリカバリポイントを保存する場合は、続けてネットワークドライバの確認を行います。

12. [ネットワーク] → [IPConfig ユーティリティを実行] をクリックします。

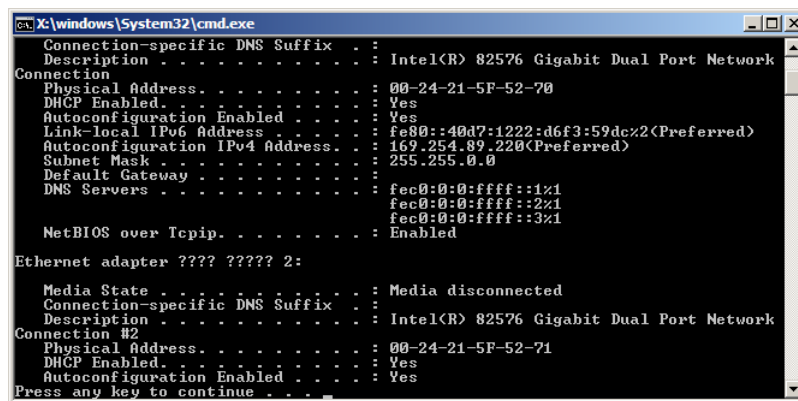


13. [IP Config ユーティリティ] 画面が表示されますので、[表示] ボタンをクリックします。



14. ここで、表示されたネットワークアダプタの状態がすべて「Media disconnected.」と表示されている場合は、お客様がケーブルを接続したネットワークアダプタは認識されていないことになりますので、ケーブルの接続を変更して認識されているネットワークアダプタをリストアに使用するか、認識されていないネットワークアダプタに対応したドライバを追加したカスタムリカバリディスクを作成してください。カスタムリカバリディスクを作成する場合、検証は終了となりますので、項番 22.へ進みます。

DHCP 環境でない場合はケーブルが接続されているネットワークアダプタの名前 (Description) を控えます。この画面の例では、ケーブルが接続されたネットワークアダプタの名前は「Intel® 82576 Gigabit Dual Port Network Connection」となります。DHCP 環境の場合は、適切な IP アドレスが割り当てられている事を確認した後は、項番 17.へ進みます。



```
C:\Windows\System32\cmd.exe
Connection-specific DNS Suffix . : 
Description . . . . . : Intel(R) 82576 Gigabit Dual Port Network
Connection
Physical Address. . . . . : 00-24-21-5F-52-70
DHCP Enabled. . . . . : Yes
Autoconfiguration Enabled . . . . : Yes
Link-local IPv6 Address . . . . . : fe80::40d7:1222:d6f3:59dc%2(Preferred)
Autoconfiguration IPv4 Address. . . : 169.254.89.220(Preferred)
Subnet Mask . . . . . : 255.255.0.0
Default Gateway . . . . . : 
DNS Servers . . . . . : fec0:0:0:ffff::1%1
                        fec0:0:0:ffff::2%1
                        fec0:0:0:ffff::3%1
NetBIOS over Tcpip. . . . . : Enabled

Ethernet adapter ????: 2:

Media State . . . . . : Media disconnected
Connection-specific DNS Suffix . : 
Description . . . . . : Intel(R) 82576 Gigabit Dual Port Network
Connection #2
Physical Address. . . . . : 00-24-21-5F-52-71
DHCP Enabled. . . . . : Yes
Autoconfiguration Enabled . . . . : Yes
Press any key to continue . . .
```

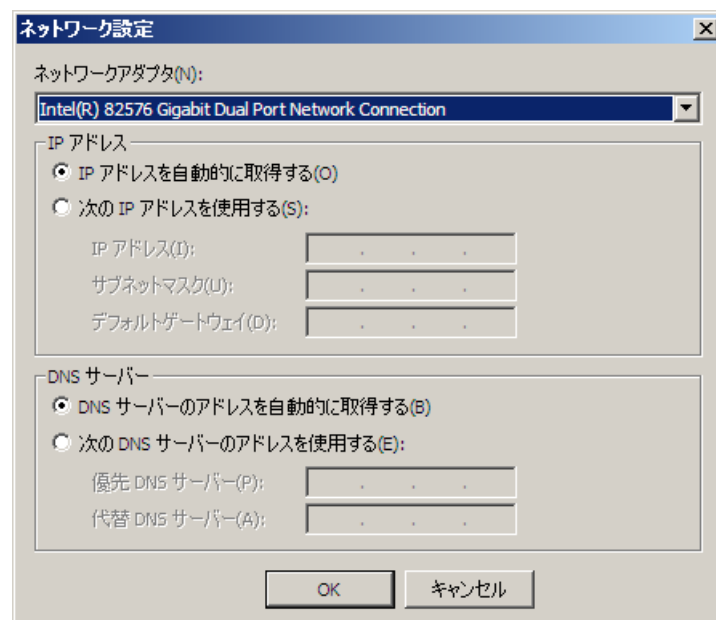
+++ 補足 +++

本画面での確認後は、何かのキーを押して画面を終了してください。その後、[閉じる] ボタンをクリックして、[IP Config ユーティリティ] 画面も終了してください。

15. [ネットワーク] → [ネットワーク接続を設定] をクリックします。



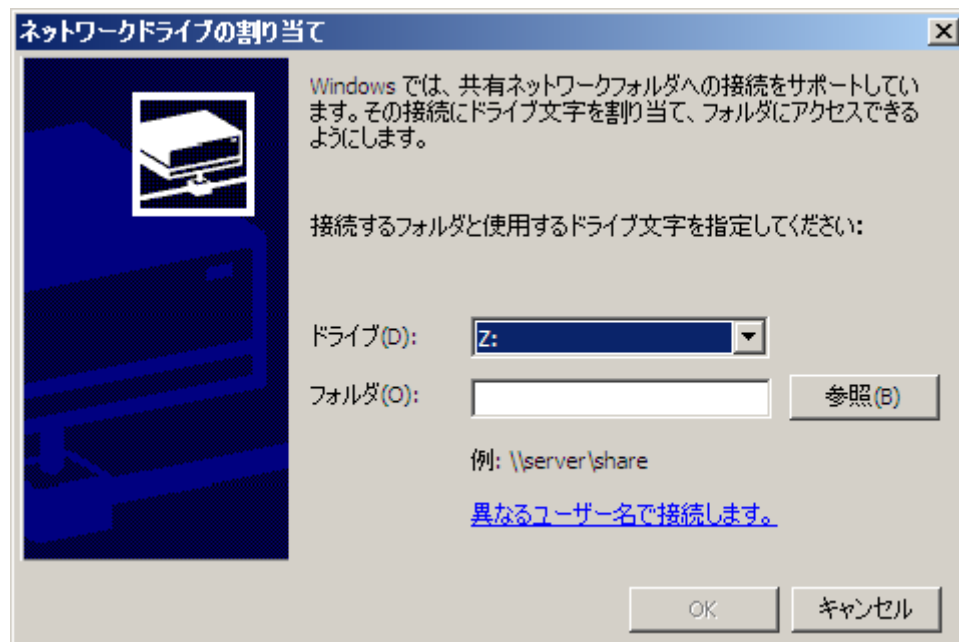
16. 項番 14.で控えたネットワークアダプタを選択し、[次の IP アドレスを使用する] のラジオボタンをチェック後、適切な値を入力します。入力終了後は、[OK] ボタンをクリックします。



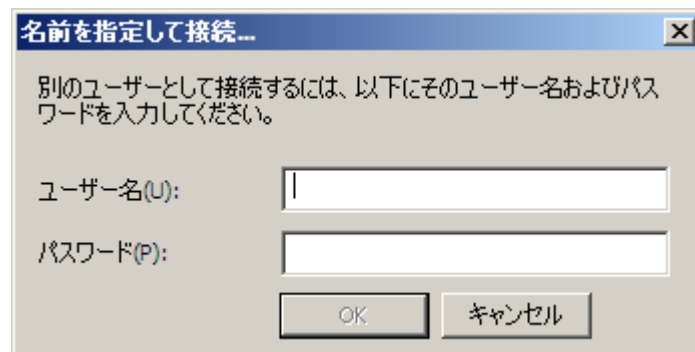
17. [ホーム] → [ネットワークドライブの割り当て] をクリックします。



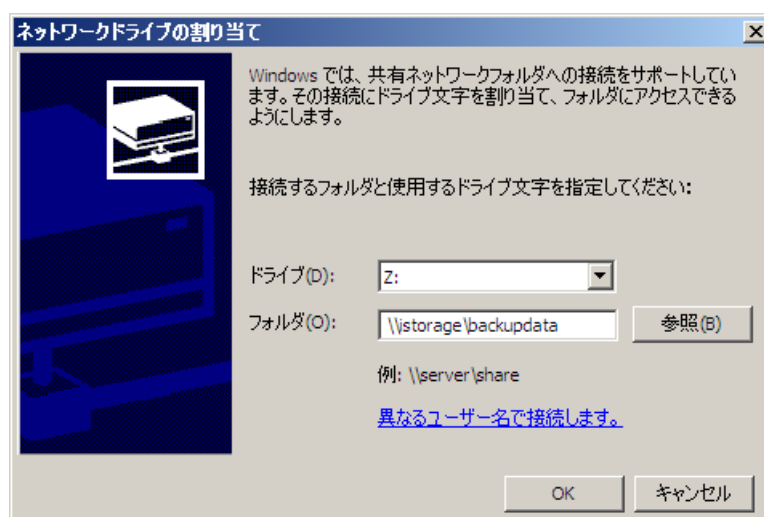
18. 以下の画面が表示されますので、使用するドライブ名を選択し、[フォルダ] のテキストボックスにリカバリポイントが保存されているコンピュータ名および共有フォルダへのパスを入力します。入力終了後、[異なるユーザー名で接続します] をクリックします。



19. 接続に必要なユーザー名とパスワードを入力し、[OK] ボタンをクリックします。



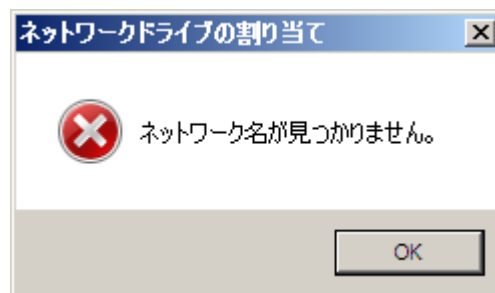
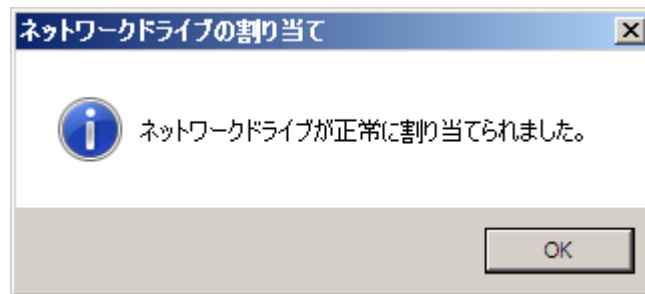
20. [OK] ボタンをクリックします。



+++ 注意 +++

共有フォルダ名を指定しても、[OK] ボタンが無効の場合は、共有フォルダ名の後ろにスペースを入力すると、[OK] ボタンが有効になります。有効になった後、入力したスペースを削除してください。

21. 接続が終了し、「ネットワークドライブが正常に割り当てられました。」というメッセージが表示されることを確認してください。ネットワーク自体に障害がないにも関わらず「ネットワーク名が見つかりません。」などのメッセージが表示され正常に終了しない場合は、最新のドライバを入手してカスタムリカバリディスクを作成してください。[OK] ボタンをクリックしてください。



22. メニュー右下の [終了] をクリックします。



23. 以下の画面が表示されますので、【はい】 ボタンをクリックします。【はい】 ボタンをクリック後は、リカバリディスクを取り出してください。



3.3 より確実なリストアのために

検証で問題がない場合でも、ドライバの不具合などにより実際にリストアを行うとエラーが発生する場合もございますので、リストアが完了するまでの確認を実施されることを推奨します。もし、リストア中にエラーが発生した場合は、デバイスドライバのベンダーより **Windows Server 2008 x86** 対応の最新ドライバを入手してリカバリディスクをカスタマイズしたのち、改めてリストア確認を実施してください。なお、リカバリディスクのカスタマイズ方法につきましては、ユーザーズガイド 第3章 の「カスタム Symantec Recovery Disk CD の作成」を参照してください。

4 本書での取り扱い範囲

本書では、以下の環境で **Backup Exec System Recovery 2010** によってバックアップ・リストアを行う手順を説明いたします。

本書に記載している以外の環境での設定方法、基本機能以外の動作についてはインストール CD 中に含まれるユーザーズガイドに記載されておりますので、ご参照ください。ユーザーズガイドは **Backup Exec System Recovery 2010 Server Edition** インストール CD-ROM の直下の **docs** フォルダ に格納されています。(ファイル名： **USERGUIDE_JA.PDF**)

4.1 バックアップシナリオ

本書で説明するバックアップシナリオは、以下の通りとなります。

- ・ バックアップ対象はサーバーのシステムボリュームとデータボリュームとする。
- ・ バックアップの単位はボリューム単位とする。
- ・ 保存先はストレージサーバー上の共有フォルダとする。共有フォルダの配下に各コンピュータ名と同名のフォルダを作成して、そこにリカバリポイントを作成することとする。
- ・ 毎日深夜の **1** 時からバックアップを行うこととする。毎週土曜日のバックアップはフルバックアップ、それ以外は増分バックアップを行う。バックアップデータは **3** 世代保存とする。
- ・ 結果の確認は各サーバーにて行うこととする。
- ・ システム全損時は、リカバリディスクよりシステムドライブをリストアすることとする。
- ・ ファイルの復旧時には、**GUI** からのファイル単位・フォルダ単位のリストアにて行うこととする。

4.2 バックアップ環境

本書で説明する環境は、以下の通りとなります。

バックアップ対象のサーバー

コンピュータ名：FILESV

OS：Windows Server 2003 R2 SP2

リカバリポイント保存先のストレージサーバー

コンピュータ名：iStorage

共有フォルダへのパス：\\iStorage\backupdata

接続に使用するユーザー名：administrator

接続に使用するパスワード：passstorage

5 Backup Exec System Recovery のインストール

5.1 インストールのための準備

Backup Exec System Recovery のインストールを行う前に、以下を準備してください。

- Backup Exec System Recovery CD

5.2 インストールの実行

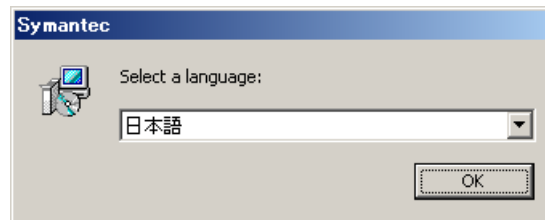
以下の手順に従って、Backup Exec System Recovery のインストールを行ってください。

+++ 注意 +++

Backup Exec System Recovery 2010 と、Symantec Endpoint Protection を両方システムにインストールする場合は、Symantec Endpoint Protection を先にインストールしてください。

◆ インストール方法

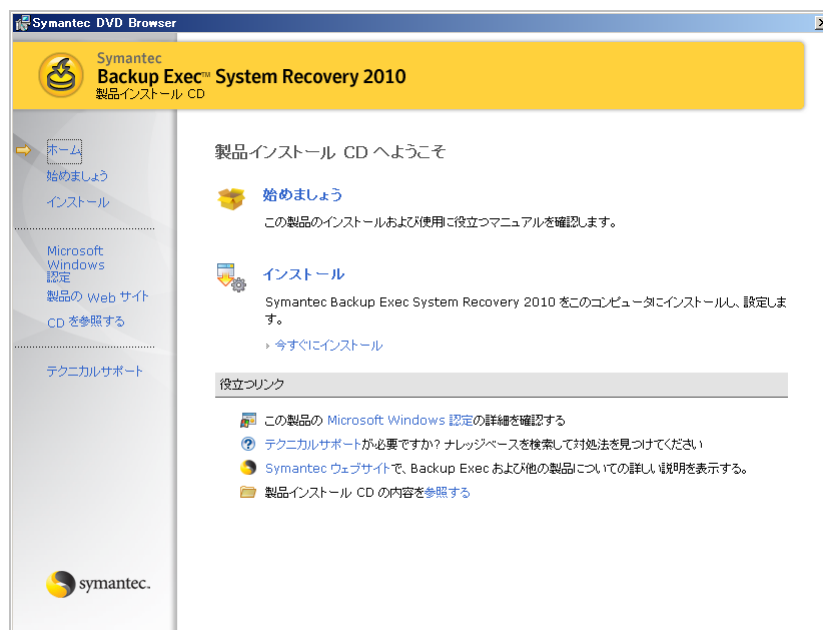
1. Backup Exec System Recovery CD を光ディスクドライブにセットします。以下の画面が自動起動しますので、日本語を選択して [OK] ボタンをクリックします。



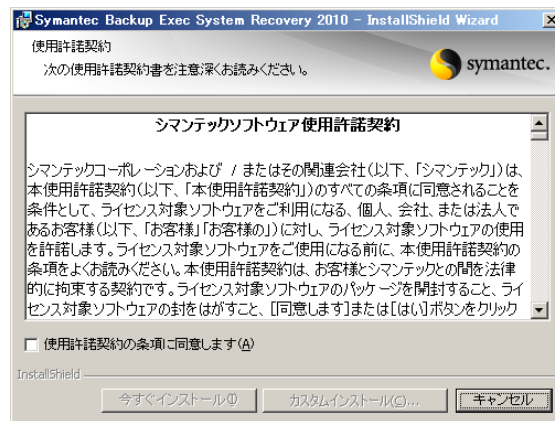
+++ 補足 +++

OSによっては、上記の画面が表示される前に「**Browser.exe**の実行」または「フォルダを開いてファイルを表示」のいずれかを選択する画面が表示される場合がありますので、「**Browser.exe**の実行」を選択してください。その後、[ユーザーアカウント制御] 画面が表示された場合は [続行] ボタンまたは [はい] ボタンをクリックしてください。

2. 以下の画面が表示されますので [今すぐにインストール] をクリックします。



3. 使用許諾契約の条項を一読し、同意する場合は、[使用許諾契約の条項に同意します] にチェックを入れ、[今すぐインストール] ボタンをクリックします。

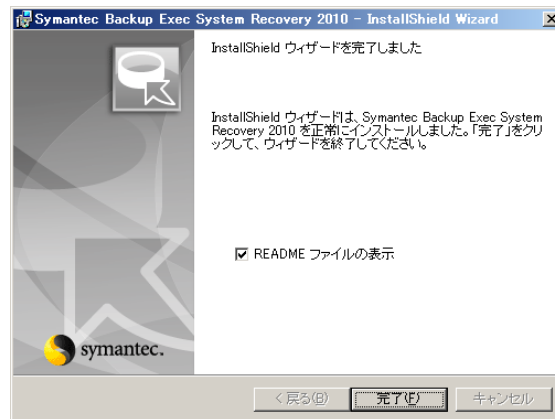


+++ プラスワン +++

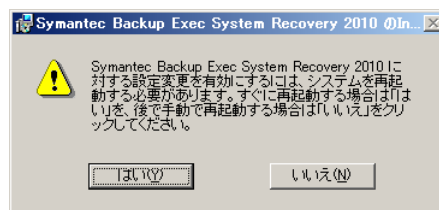
[カスタムインストール] では別フォルダへのインストール、もしくは特定の機能のみのインストールを行うことができます。[カスタムインストール] を行う場合は、ユーザーズガイド 第 2 章 の「Backup Exec System Recovery のインストール」を参照してください。

システム構成によっては、リカバリディスクにドライバファイルが含まれていないことを通知するメッセージが表示される場合があります。また、このメッセージが表示されない場合でも、リカバリディスクにドライバファイルが含まれていない場合があります。Backup Exec System Recovery インストール後は、必ずリカバリディスクからの復旧が可能であることを検証してください。検証方法については、本書第 3 章「[リカバリディスクの検証](#)」を参照してください。

4. 以下の画面が表示されますので、[完了] ボタンをクリックします。



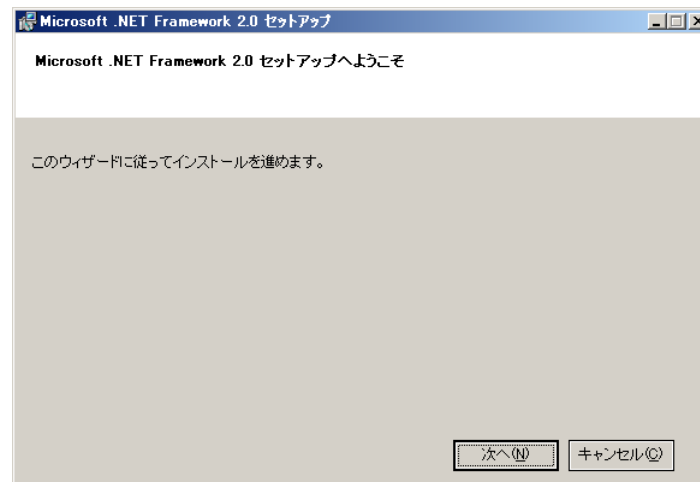
5. 以下の画面が表示されますので、[はい] ボタンをクリックしシステムの再起動を行います。[はい] ボタンクリック後は、CD を取り出してください。



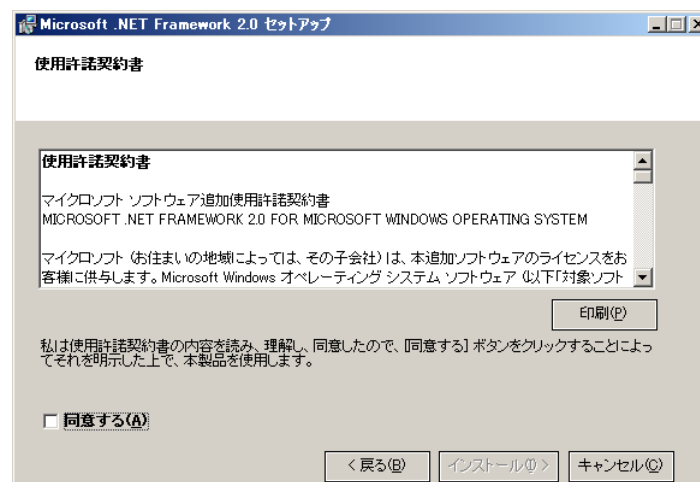
6. コンピュータ上に Microsoft .NET Framework 2.0 が存在しないか、以前のバージョンがインストールされている場合は、再起動後に以下の画面が表示されることがあります。この場合は Microsoft .NET Framework 2.0 のインストールを行う必要がありますので、[はい] ボタンをクリックします。すでに Microsoft .NET Framework 2.0 がインストール済みの場合、項番 11.へ進みます。



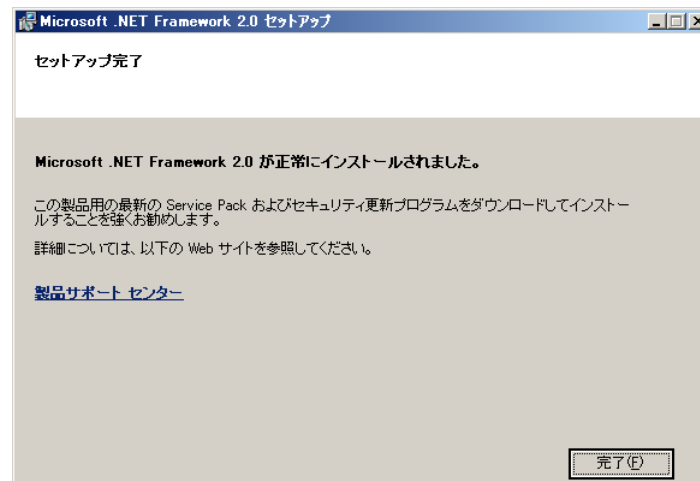
7. [次へ] ボタンをクリックします。



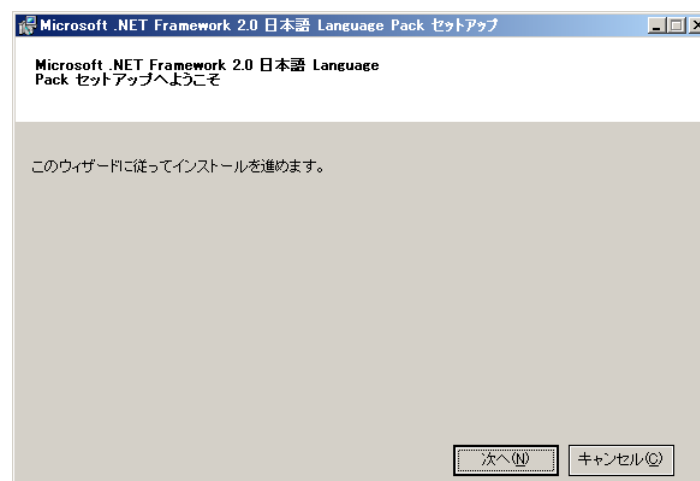
8. 使用許諾契約書の条項を一読し、同意する場合は [同意する] にチェックを入れ、[インストール] ボタンをクリックします。



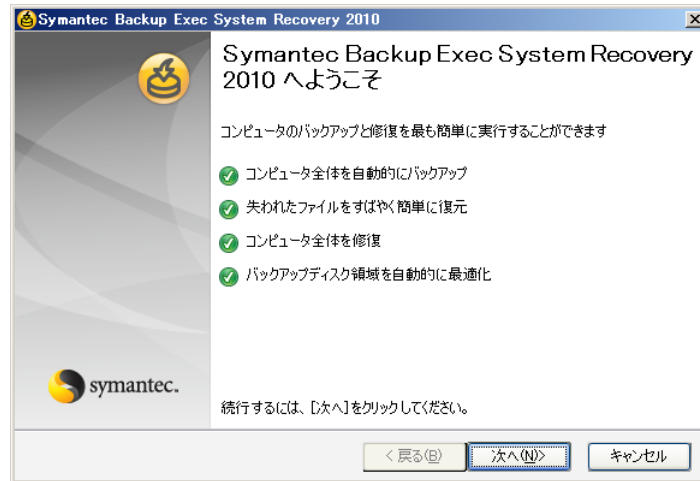
9. Microsoft .Net Framework 2.0 のセットアップが完了すると、以下の画面が表示されますので、[完了] ボタンをクリックします。



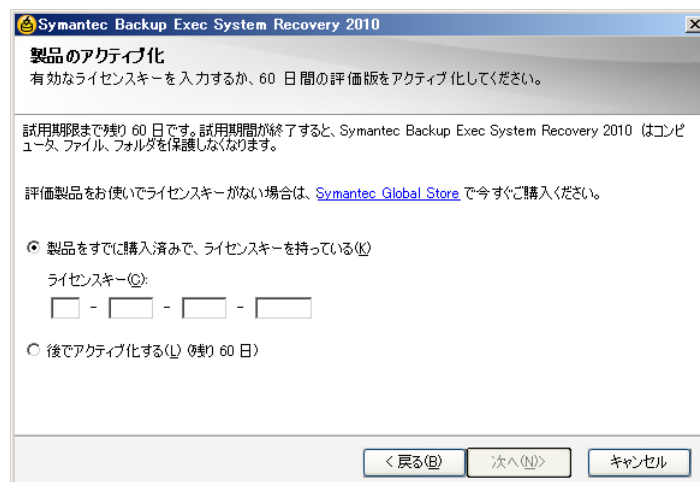
10. 続いて [Microsoft .NET Framework 2.0 日本語 Language Pack セットアップ] が起動しますので、インストールを行います。インストール手順は Microsoft .Net Framework 2.0 と同じとなりますので、同様の手順でインストールを行ってください。



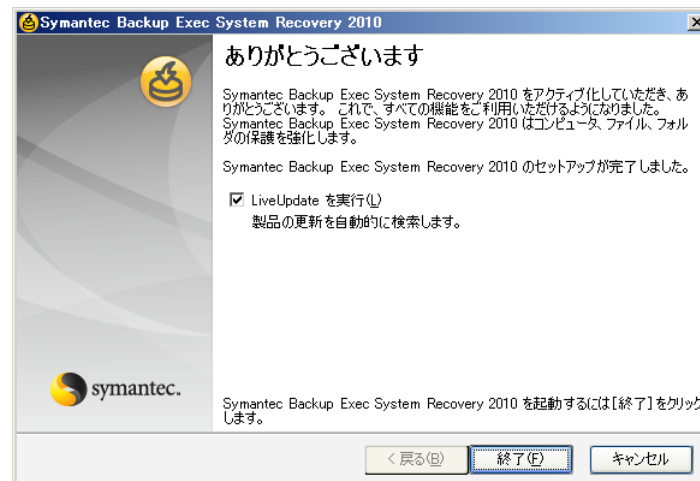
11. 以下の画面が表示されますので、[次へ] ボタンをクリックします。



12. 以下の画面が表示されますので、ライセンスキーを入力し、[次へ] ボタンをクリックします。[後でアクティブ化する (残り 60 日)] を選択しても Backup Exec System Recovery を使用することはできます。ただし、初回起動から 60 日を経過すると使用できなくなります。その場合には、ライセンスキーを入力してください。



13. ライセンス認証が完了した画面が表示されますので、[LiveUpdate を実行] のチェックをはずして [終了] ボタンをクリックします。



+++ プラスワン +++

LiveUpdate を実行すると、プログラムを最新の状態に更新することができますので、インターネットに接続されている場合はのちほど手動で LiveUpdate を実行することを推奨いたします。詳細はユーザーズガイド 第2章 の「Backup Exec System Recovery の更新」を参照してください。

以上でインストールが完了となり、Backup Exec System Recovery 2010 の画面が表示されます。

6 バックアップ

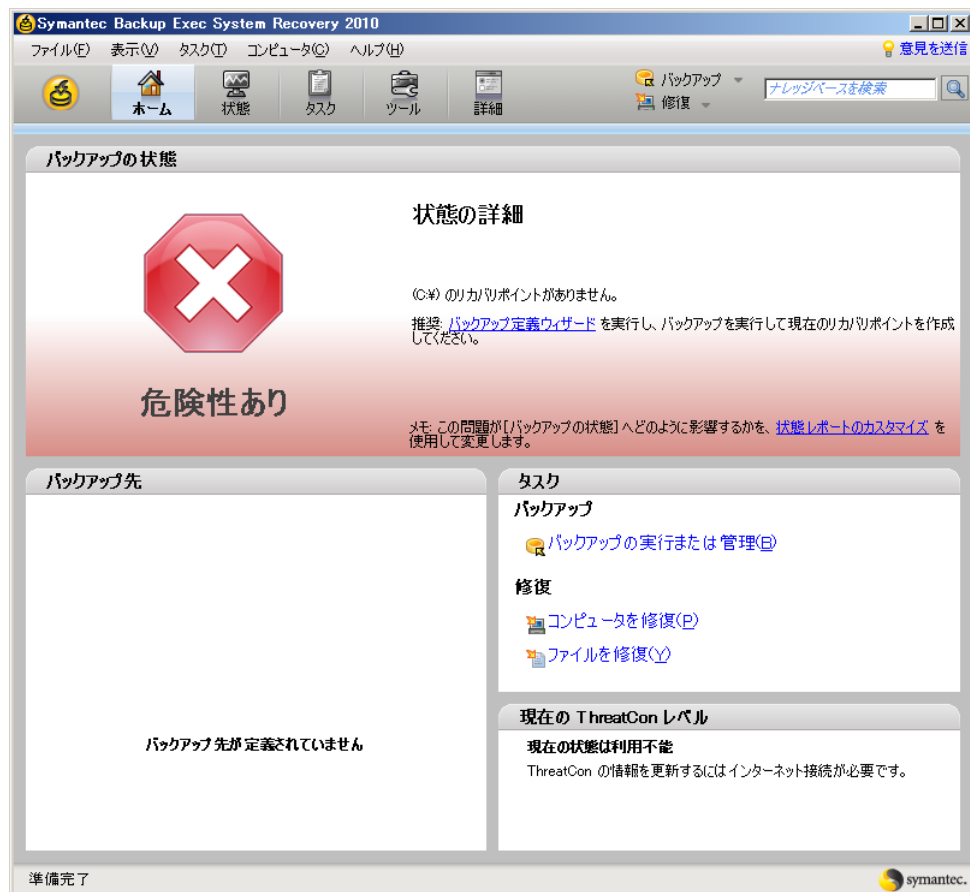
6.1 コンピュータのスケジュールバックアップ

バックアップ定義ウィザードで、コンピュータのドライブ単位のバックアップをスケジュールリングし、バックアップを自動実行することができます。ドライブ単位のバックアップでは、ドライブ全体のバックアップを、リカバリポイントとして作成します。リカバリポイントには、ファイル、フォルダ、デスクトップ設定、プログラム、およびオペレーティングシステムなどのすべての情報が含まれます。また、リストア時はコンピュータ全体だけでなく、ファイルやフォルダ単位でも復元することが可能です。

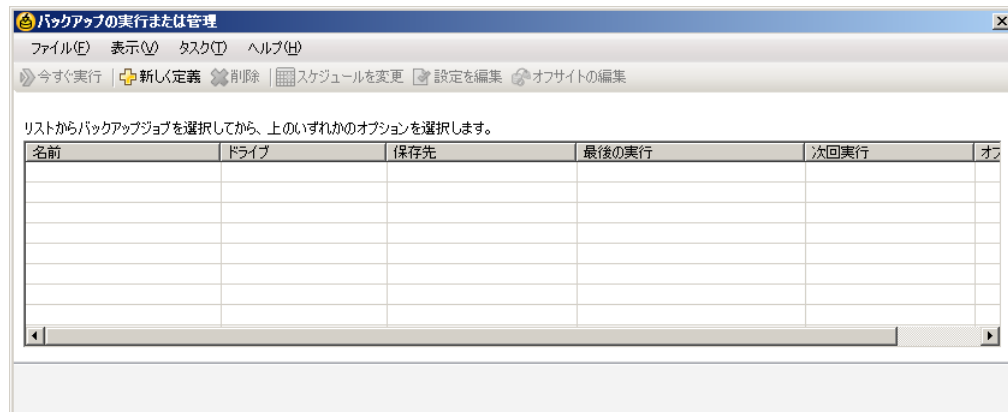
ここでは、本書第 4.1 章「[バックアップシナリオ](#)」に沿ったバックアップ設定を行います。

◆ バックアップのスケジュール設定方法

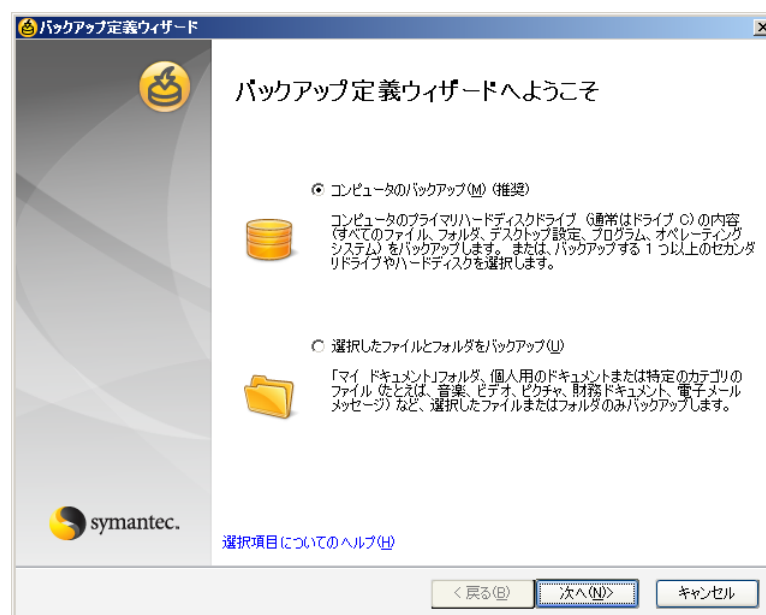
1. [スタート] → [すべてのプログラム] → [Symantec Backup Exec System Recovery] → [Backup Exec System Recovery 2010] を起動し、[ホーム] ページの [バックアップの実行または管理] をクリックします。



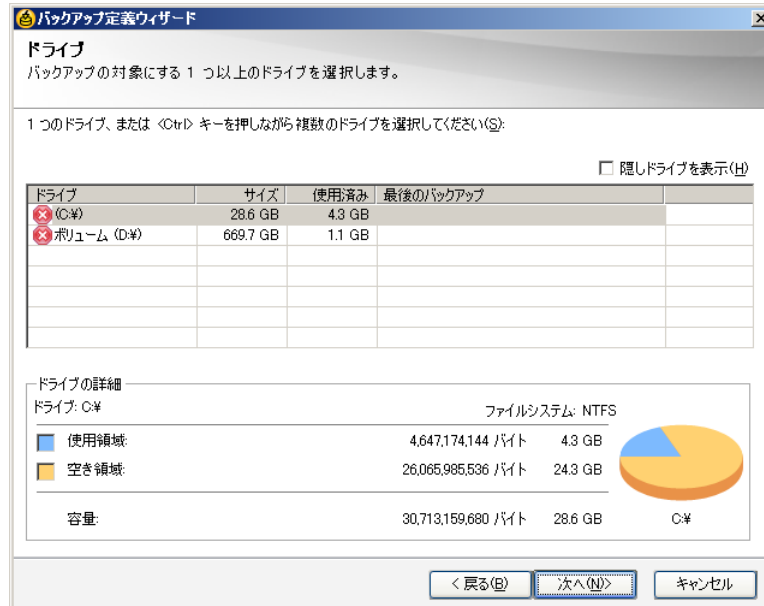
2. 以下の画面が表示されると [新しく定義] ボタンをクリックします。



3. [コンピュータのバックアップ] をチェックし、[次へ] ボタンをクリックします。

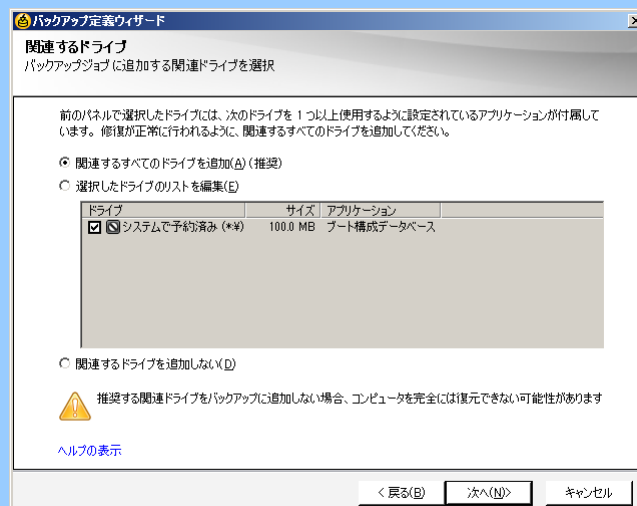


4. Sift キーを押しながらすべてのドライブを選択し、[次へ] ボタンをクリックします。

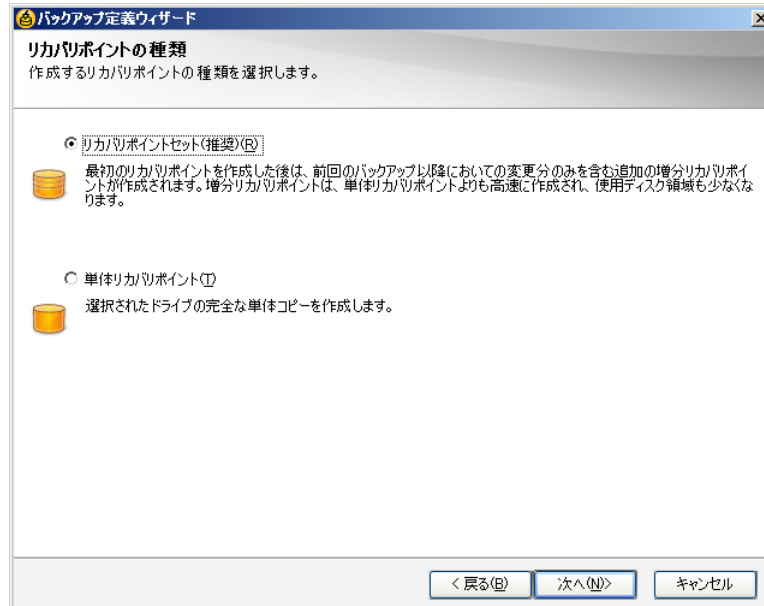


+++ 注意 +++

ご利用の OS が、Windows Server 2008 R2 の場合、以下の画面が表示されますので、[関連するすべてのドライブを追加（推奨）] がチェックされていることを確認して、[次へ] ボタンをクリックします。



5. [リカバリポイントセット] を選択し、[次へ] ボタンをクリックします。



+++ プラスワン +++

それぞれのリカバリポイントの特徴は以下の通りとなります。

リカバリポイントセット

最初に完全リカバリポイントを作成した後、次回から増分リカバリポイントを作成します。

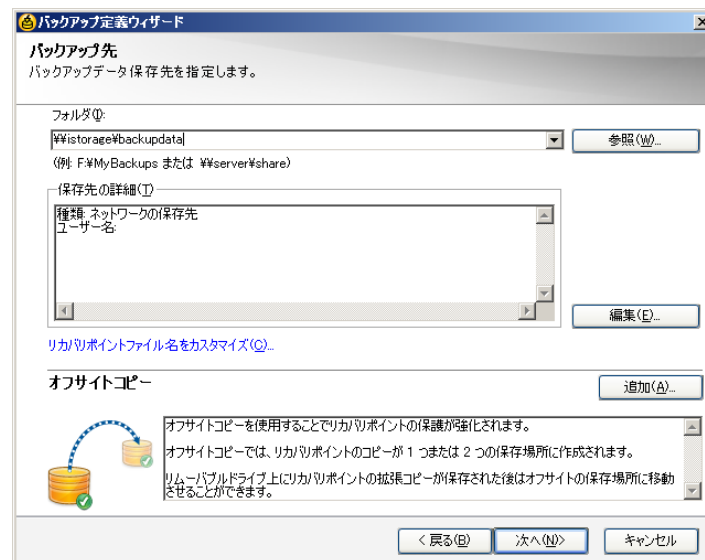
増分リカバリポイントは変更点のみをバックアップするため、完全リカバリポイントの作成に比べて短時間でバックアップが完了します。

単体リカバリポイント

毎回、選択したドライブの完全リカバリポイントを作成します。

増分のスケジューリングは行うことができません。

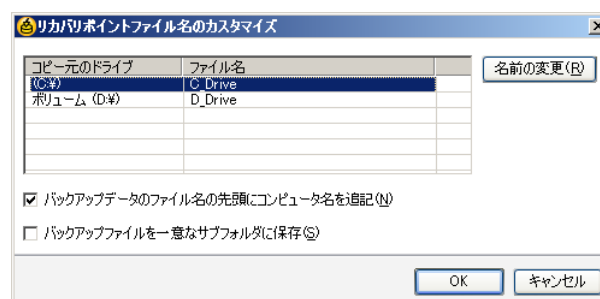
6. 作成するリカバリポイントの保存場所として「¥¥iStorage¥¥backupdata」と入力して、[リカバリポイントファイル名をカスタマイズ] をクリックします。



+++ プラスワン +++

必要に応じてリカバリポイントファイル名のカスタマイズ、オフサイトコピーの追加を行うことができます。オフサイトコピーについての詳細は、ユーザーズガイド 第 6 章 の「オフサイトコピーについて」を参照してください。

7. [バックアップファイルを一意なサブフォルダに保存] にチェックをいれて、[OK] ボタンをクリックします。



8. 項番 6.の画面に戻りますので、[次へ] ボタンをクリックします。

9. 保存先への接続に必要なユーザー名として「administrator」、パスワードとして「passstorage」と入力します。入力終了後は、[OK] ボタンをクリックします。

ネットワークの保存先

選択したネットワーク上の保存先の資格情報を編集します。

フォルダ名: ¥¥istorage¥¥backupdata¥

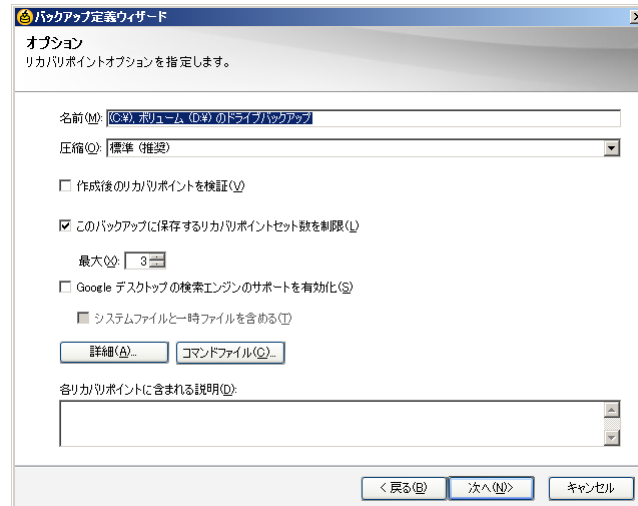
ネットワーク資格情報

ユーザー名(U): administrator

パスワード(P): passstorage

OK キャンセル

10. [次へ] ボタンをクリックします。



+++ プラスワン +++

- 名前のテキストボックスでバックアップ名を変更して分かりやすく管理することができます。また、そのほかにもバックアップ作成のオプションを設定できます。オプションについての詳細は、ユーザーズガイド 第 6 章 の「ドライブベースのバックアップの詳細オプション」を参照してください。
- バックアップの前後に実行するコマンドファイルを設定して、サービスの開始や停止を連携する事ができます。詳細は、ユーザーズガイド 第 6 章 の「バックアップ中のコマンドファイルの実行について」を参照してください。

11. [スケジュール] にチェックを入れ、スケジュールを設定します。日、月、火、水、木、金のチェックボックスにチェックを入れ、[開始時刻] に「1:00」を入力します。[新しいリカバリポイントセット（ベース）の作成を開始するタイミング] で「毎週」を選択し、[カスタム] ボタンをクリックします。

バックアップ定義ウィザード

バックアップ時刻
バックアップを実行するタイミングと頻度を指定します。

☒ スケジュール(E)

開始時刻(T): 1:00

日(S) 月(M) 火(F) 水(W) 木(T) 金(F) 土(S)

☒ ☒ ☒ ☒ ☒ ☒ ☐

1日に複数回実行(M)

新しいリカバリポイントセット(ベース)の作成を開始するタイミング(P):

毎週 カスタム(C)...

イベントトリガを選択する(Q)

詳細(D):

新しいリカバリポイントセット(ベース)の作成を開始するタイミング:
次週、初回のバックアップ実行時

スケジュールされたバックアップ時刻:
開始日: 2010/04/15, 実行日時: 毎週指定日の 1:00

< 戻る(B) 次へ(N) > キャンセル

+++ プラスワン +++

スケジュールのすべての曜日をチェックして、[カスタム] の設定を行わない場合は、初回と日曜日にフルバックアップが行われ、月曜日から土曜日の間は増分バックアップが行われる設定となります。

イベントトリガの設定を行うと、ログオフなどのイベントを契機にバックアップを開始することができます。イベントトリガについての詳細は、ユーザーズガイド 第8章 の「イベント起動バックアップの有効化」を参照してください。

12. 以下の画面が表示されますので、デフォルトでチェックされている日のチェックをはずし、土のチェックボックスにチェックを入れ、[開始時刻] に「1:00」を入力します。設定終了後、[OK] ボタンをクリックします。

新しいセットの作成スケジュール

週単位のカスタマイズ

新しいセットの作成を開始するタイミング

開始時刻(T): 1:00

日(S) 月(Q) 火(W) 水(W) 木(H) 金(F) 土(S)

☐ ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ ☒

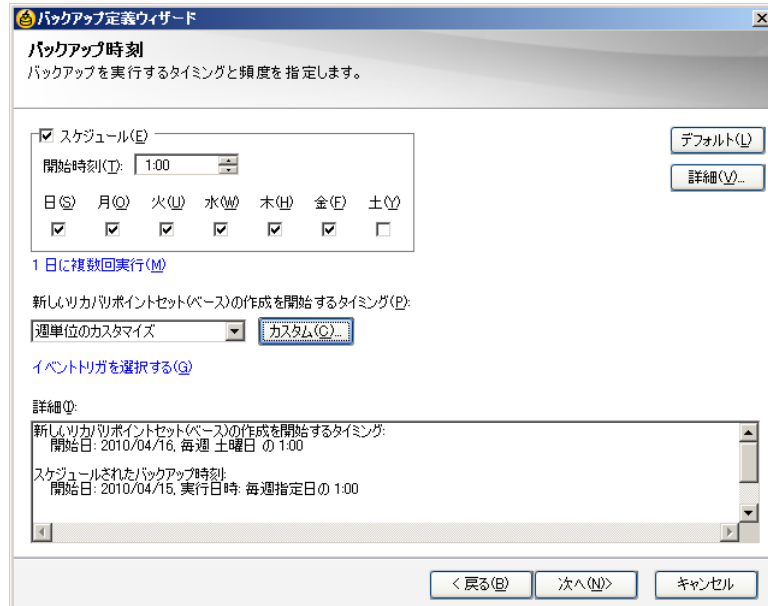
新しいリカバリポイントセット(ベース)の作成を開始するタイミング:
開始日: 2010/04/16, 毎週 土曜日 の 1:00

OK キャンセル

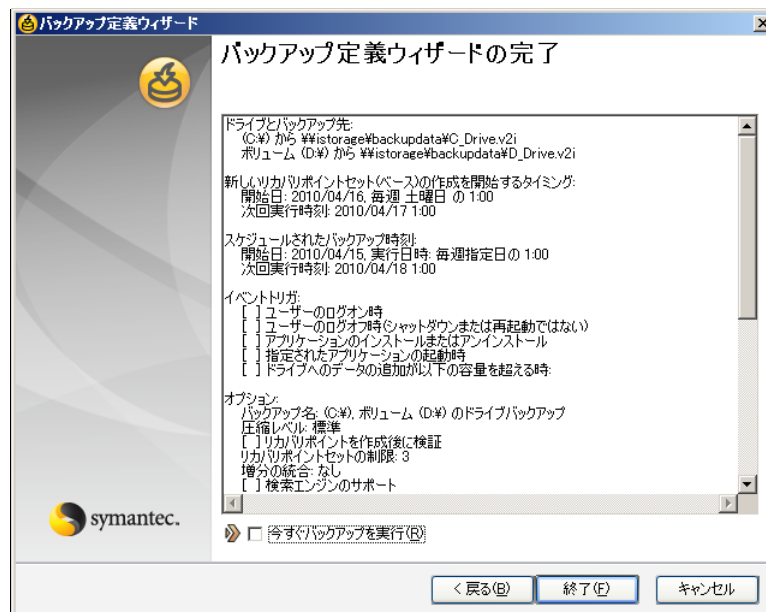
+++ プラスワン +++

カスタムの設定により、毎週土曜日にフルバックアップが行われること
になりますが、初回バックアップ時だけは曜日にかかわらずフルバック
アップが実行されます。たとえばスケジュール設定を水曜日の昼に行っ
た場合、木曜の1時に開始されるバックアップは初回バックアップのた
めフルバックアップとなります。続いて、金曜日のバックアップは増分
バックアップ、土曜日のバックアップがフルバックアップとなり、その
後は設定どおり毎週土曜日にフルバックアップが行われます。

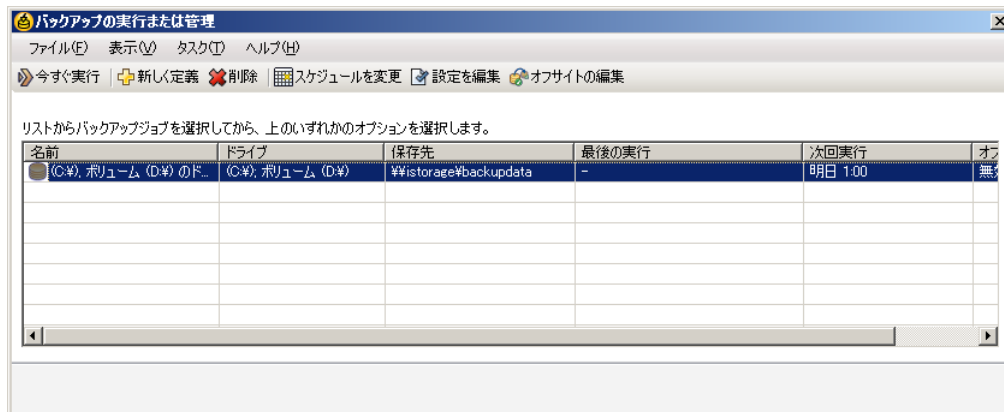
13. [次へ] ボタンをクリックします。



14. 以下の画面が表示されますので、設定した内容を確認し [終了] ボタンをクリックします。



15. [ファイル] → [終了] をクリックして [バックアップの実行または管理] 画面を終了します。



以上で、バックアップの設定は完了となります。

6.2 バックアップに関するアドバイス

バックアップを実行する場合、次のアドバイスを参考にしてください。

- コンピュータのハードディスクに問題が発生した場合でも、リカバリポイントを **iStorage NS** のようなストレージサーバーのネットワーク共有に保存しておくと、システムを復元することができます。
- コンピュータで作業中にバックアップが開始された場合、コンピュータの処理速度が低下することがあります。処理速度が低下した場合、バックアップの速度を落とすことでコンピュータのパフォーマンスを向上させることができます。詳細は、ユーザーズガイド 第 8 章 の「バックアップ速度の調整」を参照してください。
- スケジュールされたバックアップを開始するためには、コンピュータの電源をオンにし、システムを起動しておく必要があります。
- 定義したバックアップの設定情報は、後で編集することができます。詳細は、ユーザーズガイド 第 8 章 の「バックアップ設定の編集」を参照してください。
- バックアップ中は、ディスクのデフラグプログラムを実行しないでください。リカバリポイントの作成に要する時間が大幅に増加し、システムリソースの問題が発生することがあります。
- 複数のファイルを同時に更新するアプリケーションをご利用の場合、ファイルに同期が必要となります。この場合は、ファイルが含まれているすべてのドライブを同じバックアップジョブに含める必要があります。**Backup Exec System Recovery** では、複数のドライブをバックアップ定義ウィザードで選択して、同時にバックアップすることができます。
- バックアップ中に、コンピュータの電源管理機能によって休止状態やシャットダウンが実行されると、バックアップに問題が発生する可能性がありますので、バックアップ中には、電源管理機能が動作しないようにしてください。
- バックアップの動作予定時刻にコンピュータの電源が入っていなかった場合、次回ログオン時に未処理のバックアップの実行を求めるメッセージが表示されます。すぐにバックアップを行っても問題ない場合は、[はい] をクリックしてバックアップを実行します。なお、設定されている以降のスケジュールは予定通りに実行されます。

7 リストア

ドライブ単位のバックアップを行っている場合は、リカバリポイントを使用して、システムおよびデータドライブ、またはファイル・フォルダ単位のリストアができます。

ここでは、本書第 4.1 章「[バックアップシナリオ](#)」に沿ったリストアを行います。

7.1 システム全損時のコンピュータの復元

Backup Exec System Recovery によるリストアを行う前に、以下を準備してください。

- 検証済みリカバリディスク

システムドライブを復元する場合は、リカバリディスクを利用します。OS 上で起動した Backup Exec System Recovery の画面上にも [コンピュータの復元] の項目がありますが、システムドライブの復元には使用しません。

◆ コンピュータの復元方法

1. リカバリディスクを光ディスクドライブにセットし、CD よりシステムを起動します。
2. 言語の設定画面が表示されますので、日本語を選択して [OK] ボタンをクリックします。選択しなかった場合は自動的に英語が選択され、以降の画面が英語での表示となりますが、メニュー画面起動後に改めて日本語を選択することも可能です。
3. [エンドユーザー使用許諾契約] 画面が表示されますので、使用許諾契約の条項を一読し、同意する場合は [同意する] ボタンをクリックします。
4. ネットワークサービス起動確認画面が表示されますので、[はい] ボタンをクリックします。10 秒間何も選択しなければ [はい] ボタンを選択したとみなし、自動的に次へ進みます。以降、DHCP 環境でない場合は IP アドレスの設定が必要になりますので、項番 5.に進みます。DHCP 環境の場合は設定する必要がありませんので、項番 10.に進みます。

カスタムリカバリディスク利用時は、項番 4.でネットワークサービス起動確認画面は表示されません。カスタムリカバリディスクの作成時に、[オプション] 画面の [ネットワークサービスを自動的に開始] をチェックせずに作成した場合は、項番 5.、項番 8.、項番 10.のいずれかの操作後に表示されます。ネットワークサービス起動確認画表示後は、[はい] ボタンをクリックしてください。

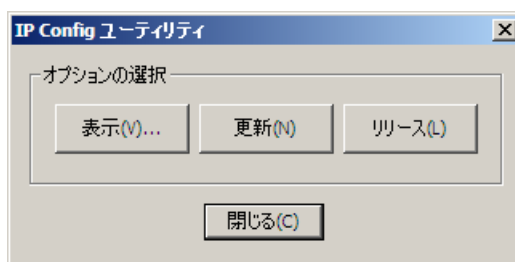
5. [ネットワーク] → [IPConfig ユーティリティを実行] をクリックします。



+++ 補足 +++

ご利用の装置のポートがひとつしかない場合は設定を行うネットワークアダプタを確認する必要はないので、項番 6.から項番 7.を省略することができます。

6. [表示] ボタンをクリックします。



7. ケーブルが接続されているネットワークアダプタの名前 (Description) を確認します。この画面の例では、ケーブルが接続されたポートの名前は「Intel® 82576 Gigabit Dual Port Network Connection」となります。

```
C:\windows\System32\cmd.exe
Connection-specific DNS Suffix . : 
Description . . . . . : Intel(R) 82576 Gigabit Dual Port Network
Connection
Physical Address. . . . . : 00-24-21-5F-52-70
DHCP Enabled. . . . . : Yes
Autoconfiguration Enabled . . . . : Yes
Link-local IPv6 Address . . . . : fe80::40d7:1222:d6f3:59dc%2(Preferred)
Autoconfiguration IPv4 Address . . : 169.254.89.220(Preferred)
Subnet Mask . . . . . : 255.255.0.0
Default Gateway . . . . . : 
DNS Servers . . . . . : fec0:0:0:ffff::1%1
                       fec0:0:0:ffff::2%1
                       fec0:0:0:ffff::3%1
NetBIOS over Tcpip. . . . . : Enabled

Ethernet adapter ????: ????: 2:
Media State . . . . . : Media disconnected
Connection-specific DNS Suffix . : 
Description . . . . . : Intel(R) 82576 Gigabit Dual Port Network
Connection #2
Physical Address. . . . . : 00-24-21-5F-52-71
DHCP Enabled. . . . . : Yes
Autoconfiguration Enabled . . . . : Yes
Press any key to continue . . . .
```

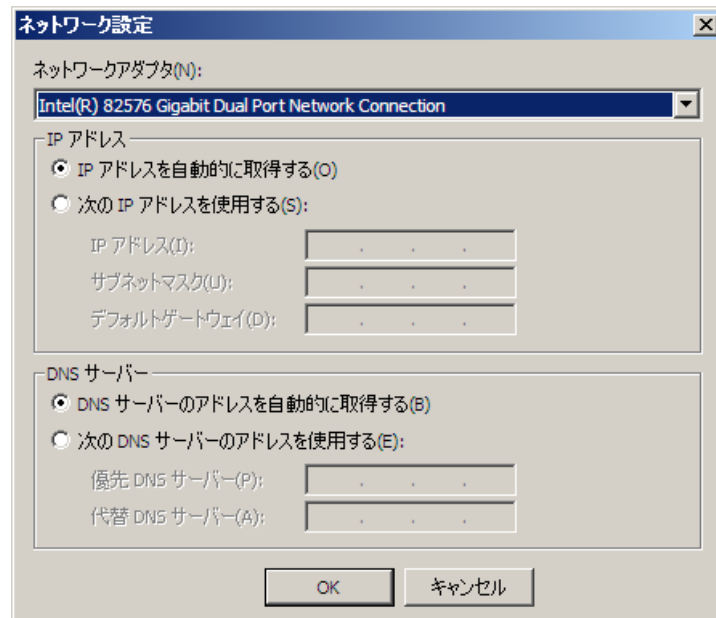
+++ 補足 +++

本画面での確認後は、何かのキーを押して画面を終了してください。その後、[閉じる] ボタンをクリックし、[IP Config ユーティリティ] 画面も終了してください。

8. [ネットワーク] → [ネットワーク接続を設定] をクリックします。



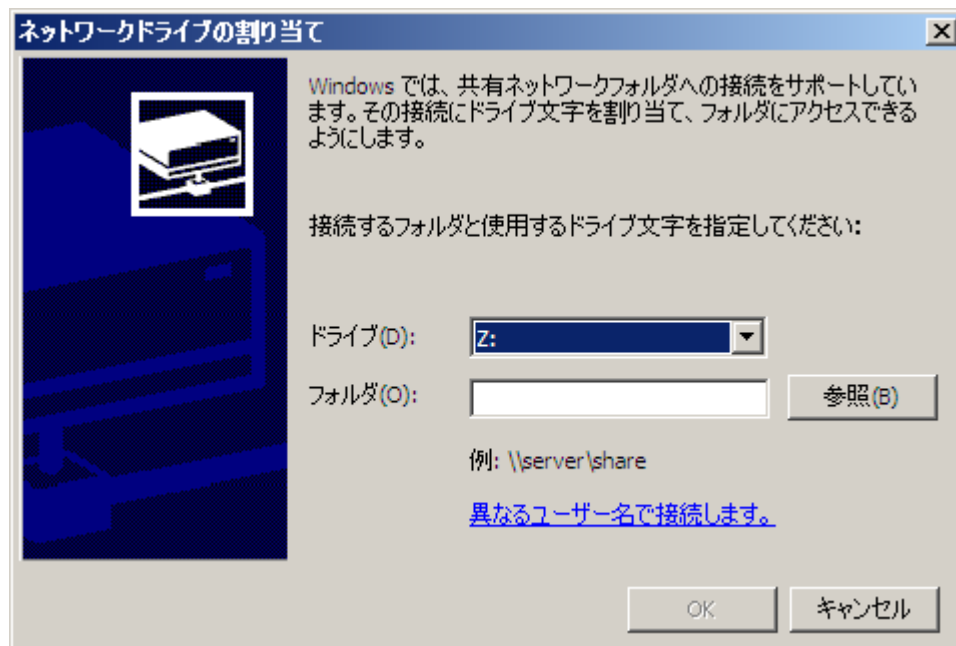
9. 項番 7.で確認したネットワークアダプタを選択し、[次の IP アドレスを使用する] のラジオボタンをチェックし、適切な値を入力します。入力終了後は、[OK] ボタンをクリックします。



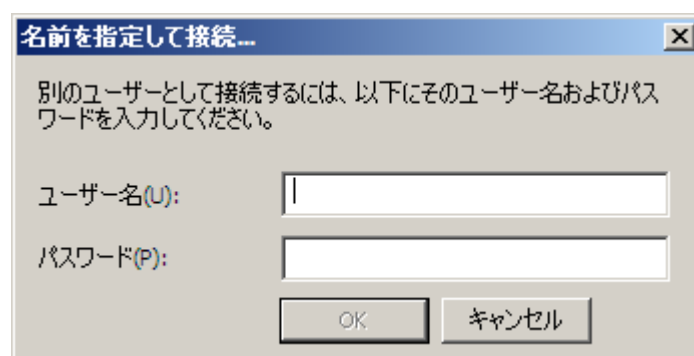
10. [ホーム] → [ネットワーク ドライブの割り当て] をクリックします。



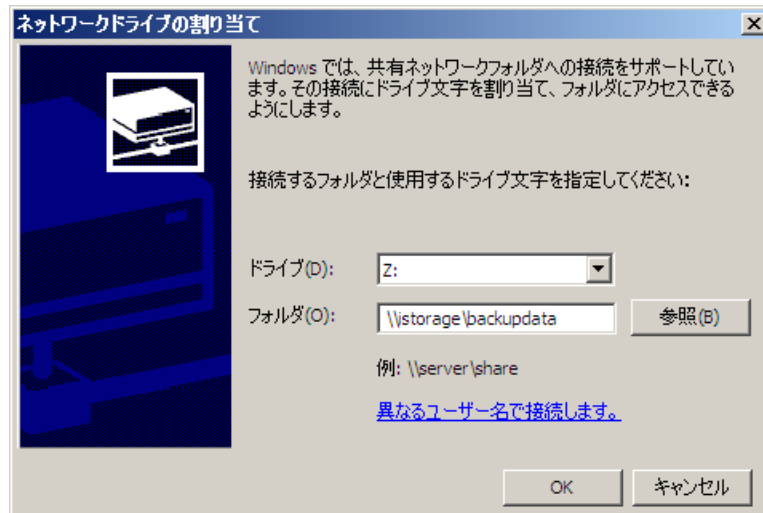
11. 以下の画面が表示されますので、使用するドライブ名を選択し、[フォルダ] のテキストボックスにリカバリポイントが保存されている共有フォルダへのパスとして「¥¥iStorage¥¥backupdata」と入力します。入力終了後、[異なるユーザー名で接続します] をクリックします。



12. 接続に必要なユーザー名として「administrator」を、パスワードとして「passstorage」を入力し、[OK] ボタンをクリックします。



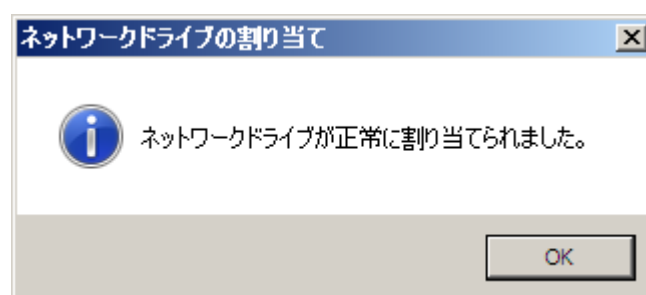
13. [OK] ボタンをクリックします。



+++ 注意 +++

共有フォルダ名を指定しても、[OK] ボタンが無効の場合は、共有フォルダ名の後ろにスペースを入力すると、[OK] ボタンが有効になります。有効になった後、入力したスペースを削除してください。

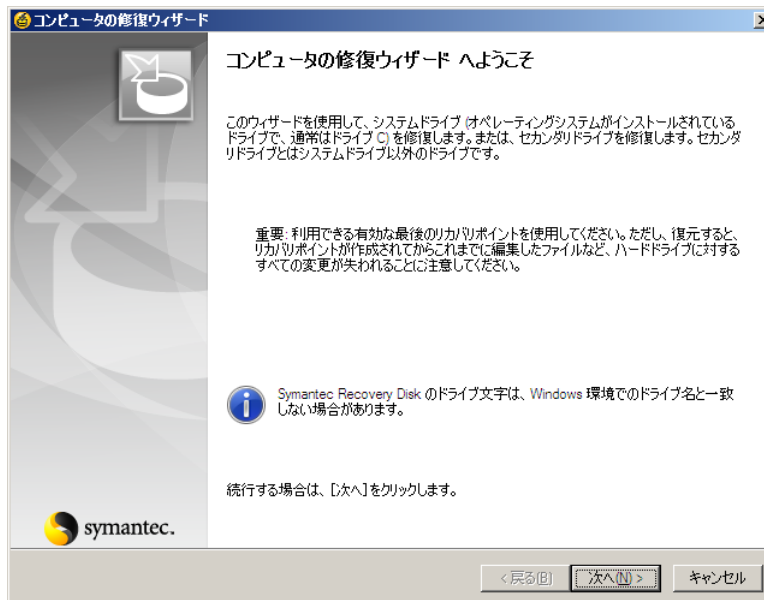
14. 接続が終了すると、以下の画面が表示されますので、[OK] ボタンをクリックします。



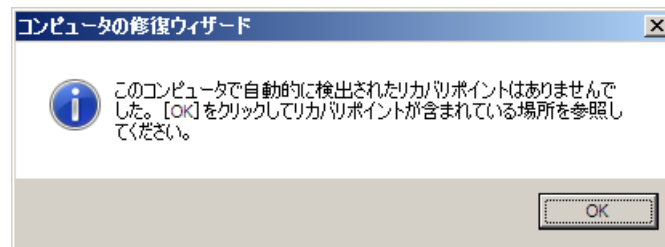
15. 修復ウィザードを起動させるために、[ホーム] → [コンピュータを修復] をクリックします。



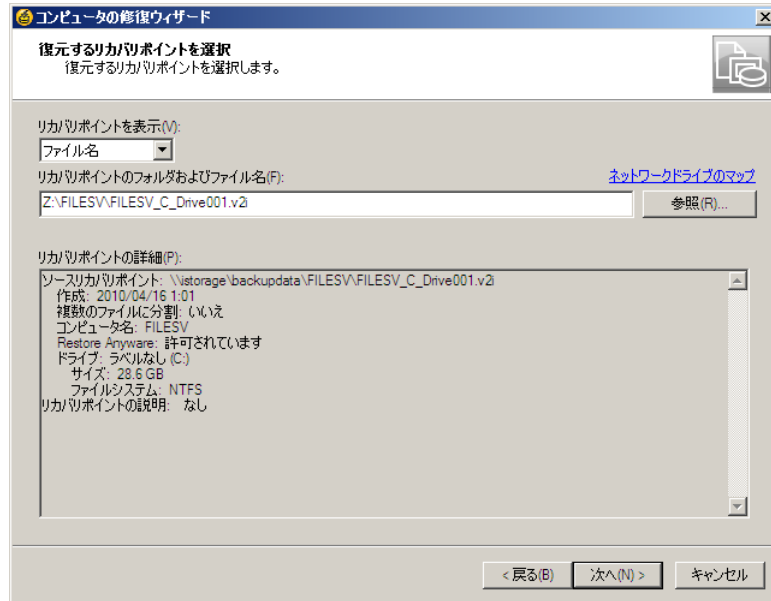
16. 以下の画面が表示されますので、[次へ] ボタンをクリックします。



17. 以下の画面が表示された場合は、[OK] ボタンをクリックします。



18. 以下の画面が表示されますので、[リカバリポイントを表示] 項目のプルダウンメニューで [ファイル名] を選択します。[参照] ボタンをクリックし、先ほど作成したネットワークドライブに保存されているシステムドライブのリカバリポイント (FILESV_C_Drive001.v2i) を指定した後、[次へ] ボタンをクリックします。



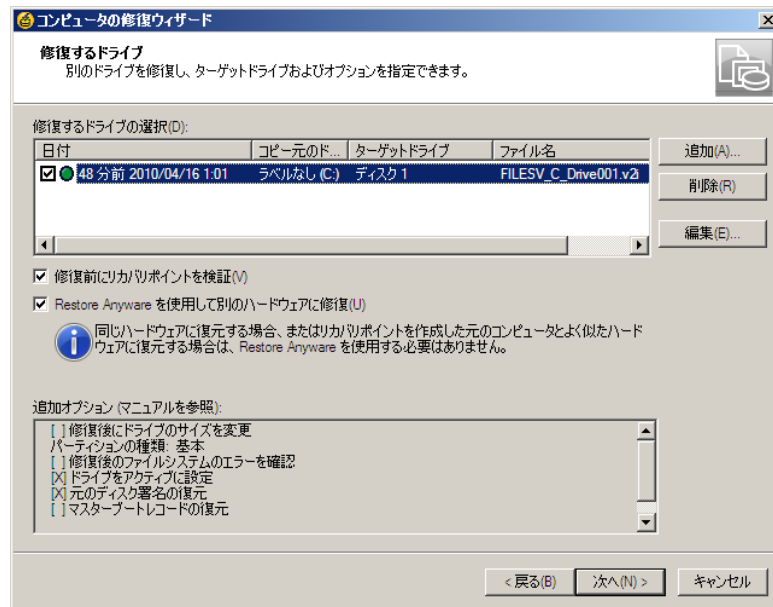
+++ 注意 +++

リカバリポイントが分割されている場合は、FILESV_C_Drive001_s1.v2i のようなファイル名のファイルが複数作成されますが、リストア時には通常と同様に FILESV_C_Drive001.v2i の名前のファイルを指定します。

+++ 注意 +++

Windows Server 2008 R2 のシステムをリストアする場合は、まず、最初にブート用パーティションのリストアを実行し、リストア終了後再起動を行わずに続けて、システムドライブのリストアを実行してください。なお、[ドライブをアクティブに設定] のチェックはブート用パーティションにてチェックしてください。(項番 20.にて設定)

19. 修復するドライブの情報が表示されます。[Restore Anyware を使用して別のハードウェアに修復] のチェックをはずし、[編集] ボタンをクリックします。

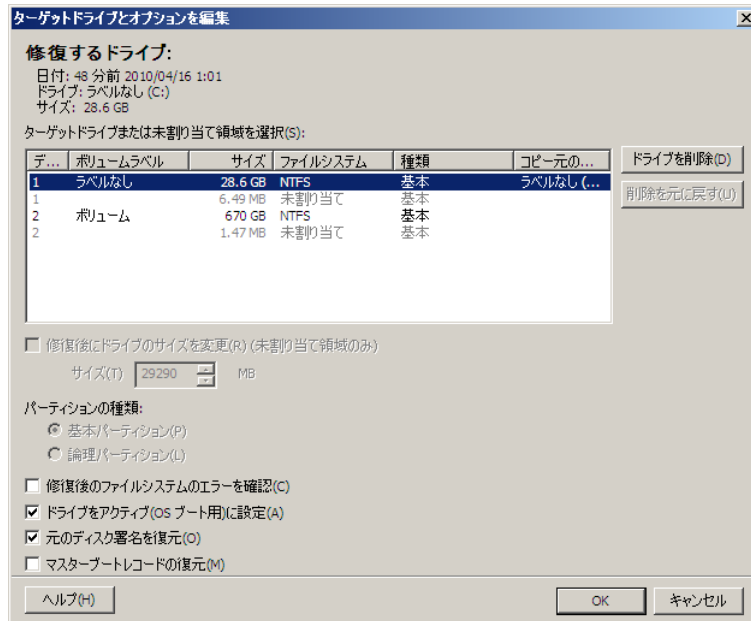


+++ プラスワン +++

必要に応じて「修復前にリカバリポイントを検証」、「Restore Anyware を使用して別のハードウェアに修復」の設定を行うことができます。Restore Anyware の詳細は、ユーザーズガイド 第 14 章の「Restore Anyware を使用した復元」を参照してください。

ディスクの交換などにより、データドライブも同時に復元する場合はこの画面からリストアを行うドライブを追加することができます。詳細はユーザーズガイドの第 14 章の「コンピュータの修復」を参照してください。

20. [ドライブをアクティブ (OS ブート用) に設定]、[元のディスク署名を復元] にチェックが入っていること、ターゲットドライブとしてシステムドライブがインストールされていた領域が正しく指定されていることを確認し、[OK] ボタンをクリックします。



+++ 注意 +++

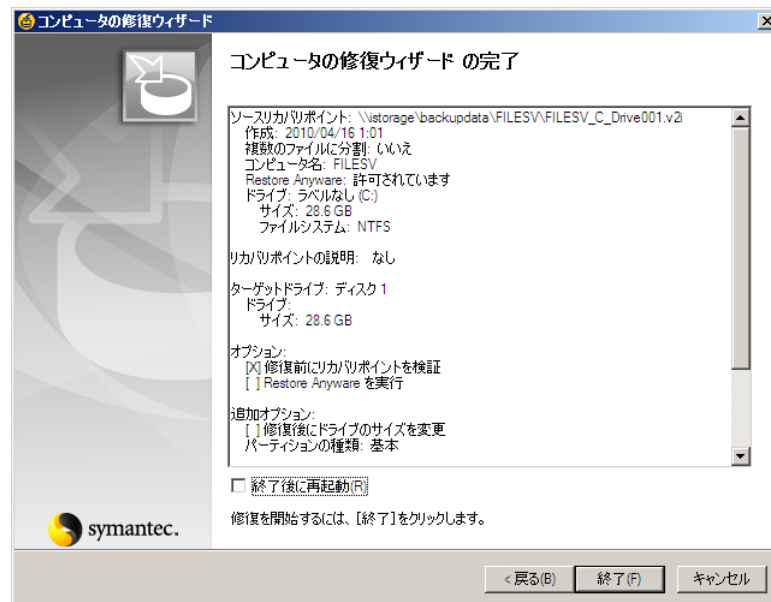
ディスク交換などで、未使用のディスクにリストアを行う場合は必ず [マスターブートレコードの復元] にチェックを入れてください。

+++ プラスワン +++

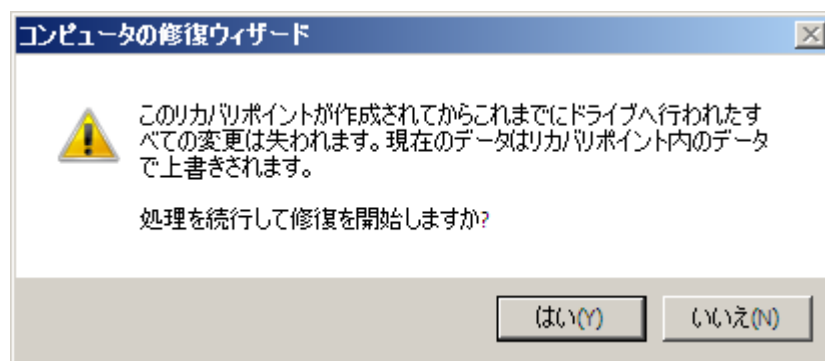
既定以外のリストア処理については、オプションを設定する事で実現できます。詳細は、ユーザズガイドの第 14 章の「ターゲットドライブとオプションを編集」を参照してください。

- ・ターゲットドライブの選択
- ・未割り当て領域の編集
- ・パーティションの種類の選択
- ・修復後のファイルシステムのエラーを確認
- ・ドライブをアクティブ(ブート OS 用)に設定
- ・元のディスク署名を復元
- ・マスターブートレコードの復元

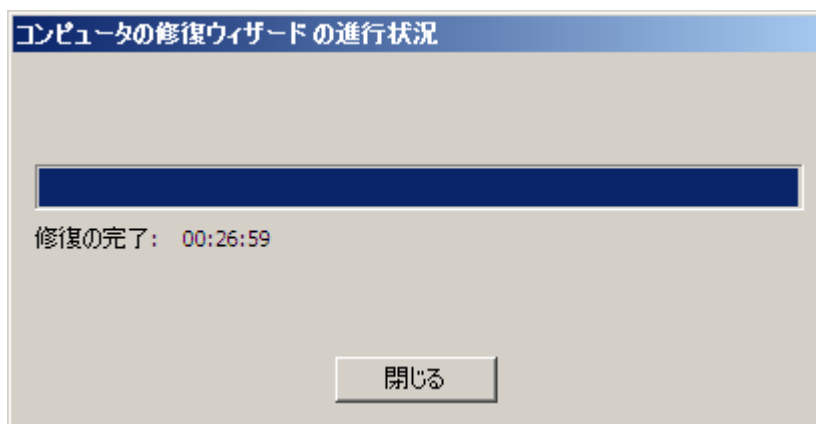
21. 項番 19.の画面に戻りますので、[次へ] ボタンをクリックします。
22. 以下の画面が表示されますので内容を確認し、[終了] ボタンをクリックします。



23. 以下の警告画面が表示されますので [はい] ボタンをクリックします。これにより、復元が開始されます。



24. 復元が完了すると、[閉じる] ボタンをクリックします。



25. メニュー画面にて、[終了] をクリックします。



26. 以下の画面が表示されますので、[はい] ボタンをクリックしシステムを再起動します。[はい] ボタンのクリック後は、CD を取り出します。



以上で、復元は完了となります。

7.2 ファイルの復旧

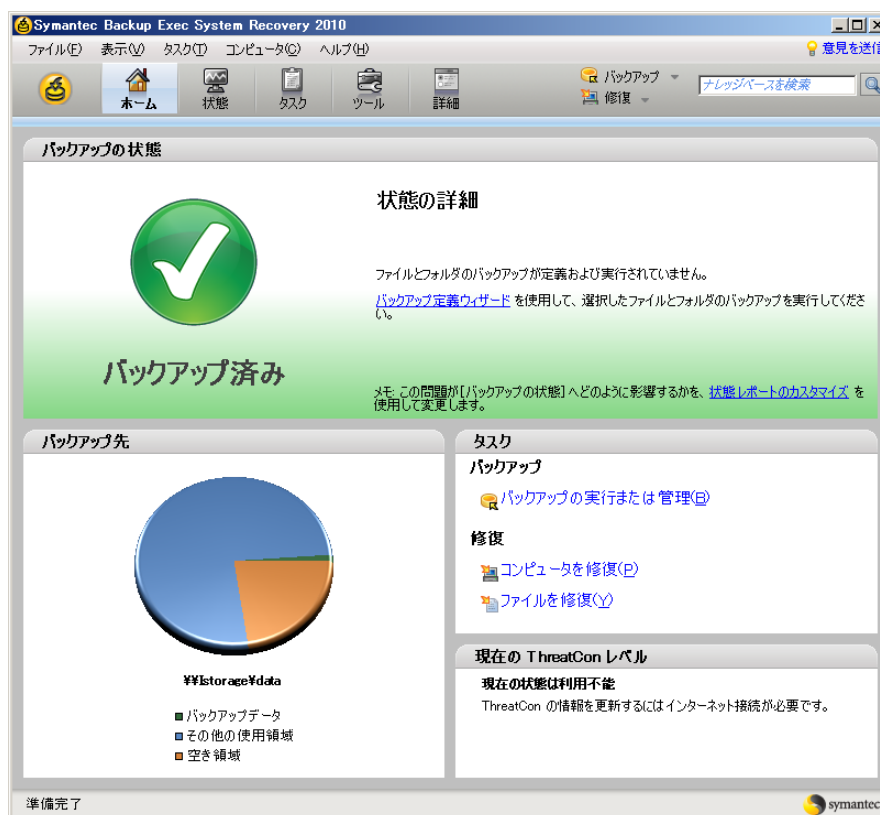
Backup Exec System Recovery では、ドライブすべてを復元するだけでなく、指定したファイルやフォルダのみを復元することもできます。

ここでは、本書第 4.1 章「[バックアップシナリオ](#)」に沿ったリストアを行います。

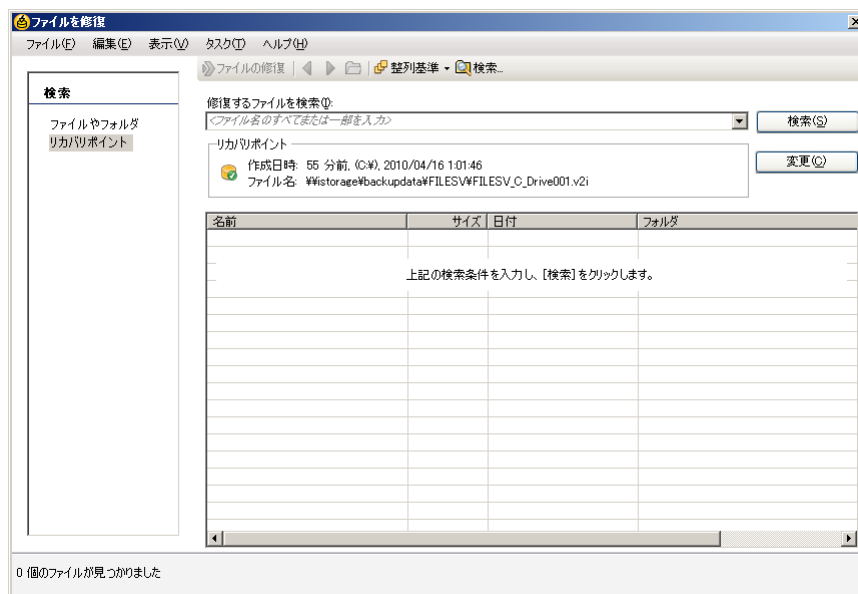
復元の手段として、Backup Exec System Recovery の GUI からの方法と、リカバリポイントブラウザを利用した方法を紹介します。エクスプローラのように、ツリービューでファイルを選択して復元する場合は、リカバリポイントブラウザの項を参照してください。

◆ ファイルの復旧方法（GUI）

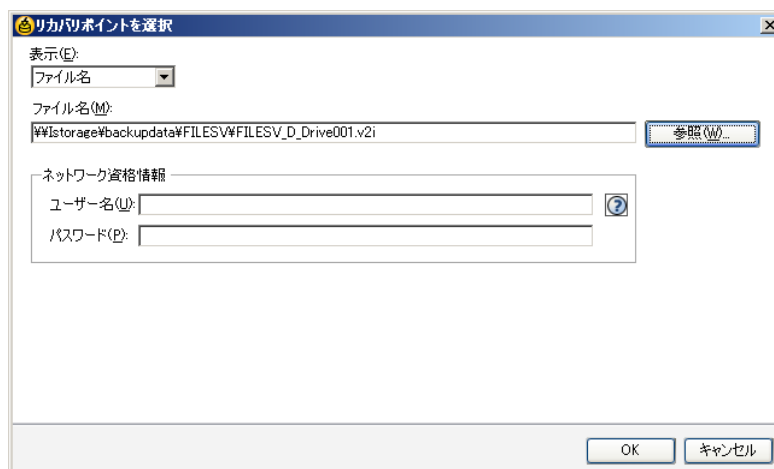
1. [スタート] → [すべてのプログラム] → [Symantec Backup Exec System Recovery] → [Backup Exec System Recovery 2010] を起動し、[ホーム] ページの [ファイルを修復] をクリックします



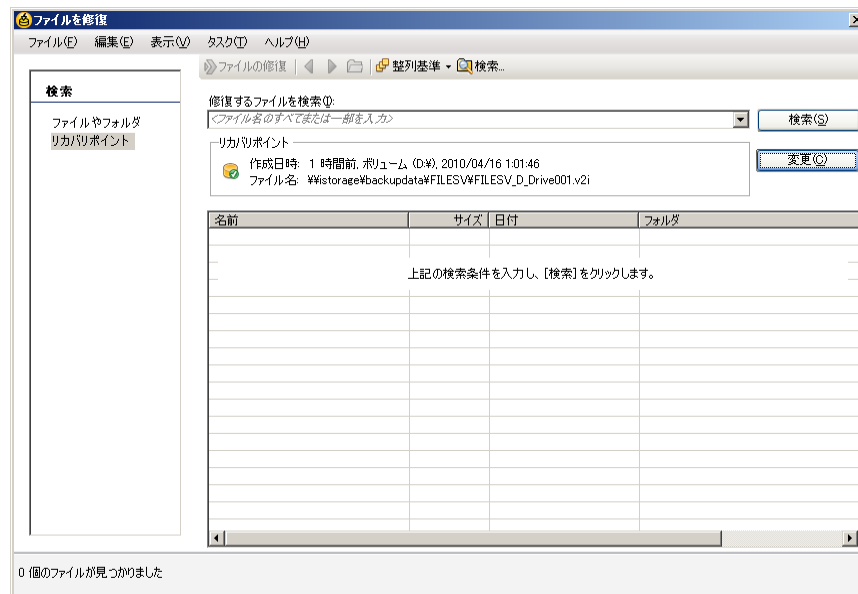
2. 左ペインの [リカバリポイント] をクリックすると、右ペインの [リカバリポイント] に最新のリカバリポイントとしてシステムドライブのリカバリポイントが表示されますので、データドライブのリカバリポイントからリストアを行うために、[変更] ボタンをクリックします。



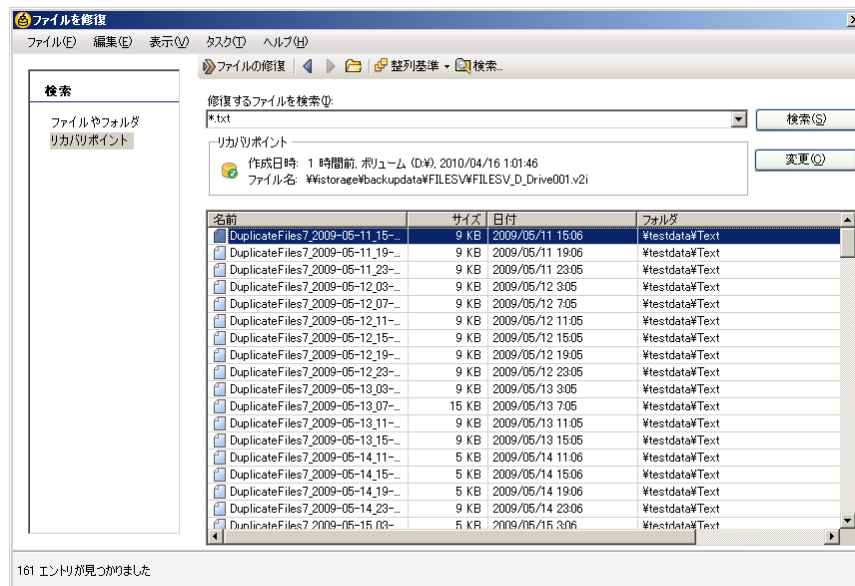
3. 以下の画面が表示されますので、[表示] 項目のプルダウンメニューで [ファイル名] を選択します。
[参照] ボタンをクリックして、「¥¥iStorage¥backupdata¥FILESV」に保存されているデータドライブのリカバリポイント (FILESV_D_Drive001.v2i) を指定、リカバリポイント保存先への接続に必要なユーザー名として「administrator」、パスワードとして「passstorage」と入力し、[OK] ボタンをクリックします。



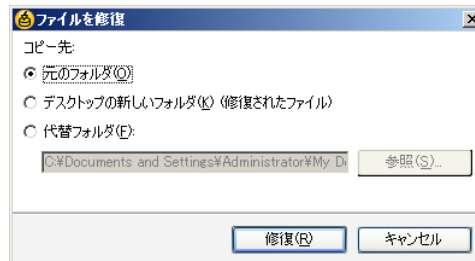
- 右ペインの [リカバリポイント] にデータドライブのリカバリポイントの情報が表示されますので、修復したいファイル名を [修復するファイルを検索] に入力して、[検索] ボタンをクリックします。



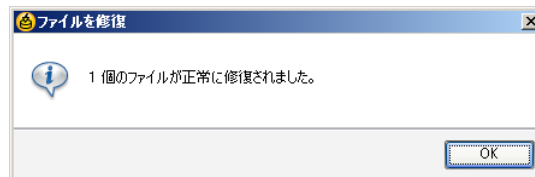
- 復元したいファイル、またはフォルダを選択し、[ファイルの修復] をクリックします。



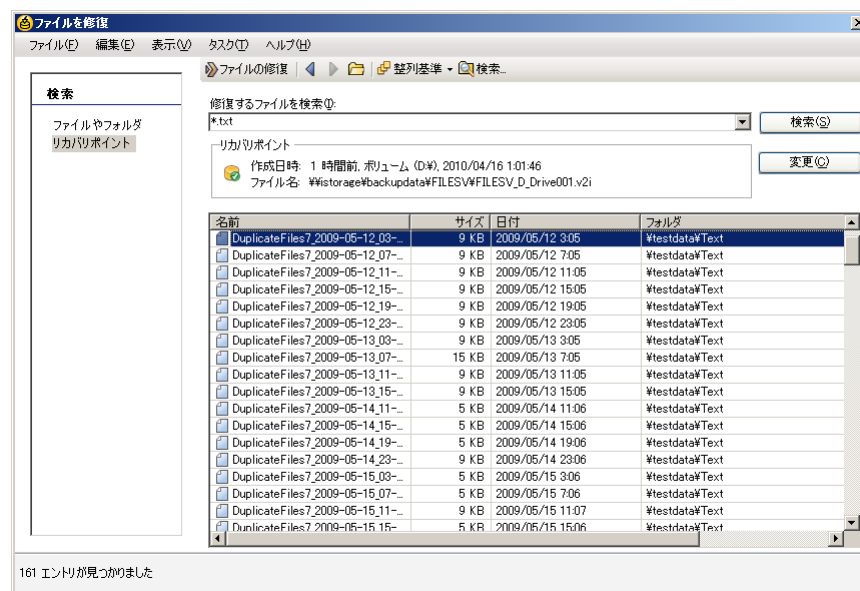
6. 復元先を選択し、[修復] ボタンをクリックします。



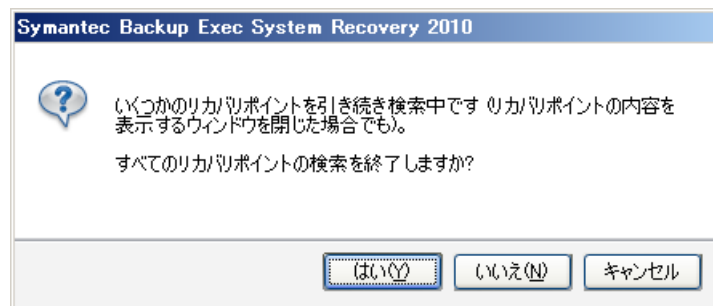
7. 完了後、以下の画面が表示されますので、[OK] ボタンをクリックします。



8. [ファイル] → [終了] をクリックし、[ファイルを修復] 画面を終了します。



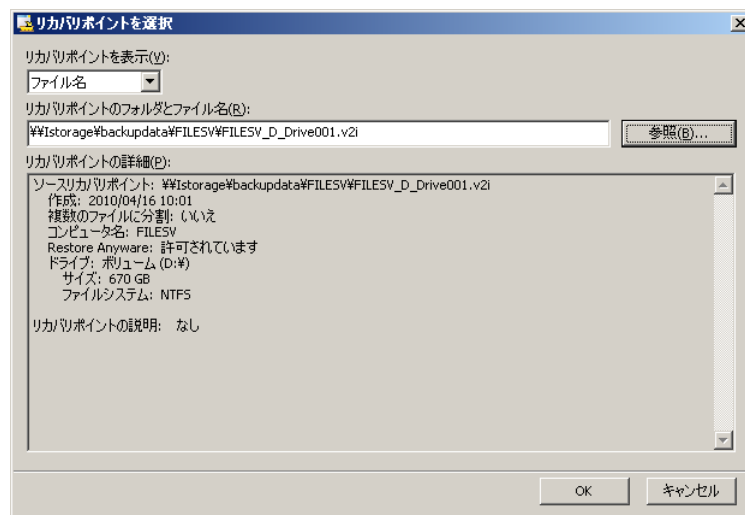
9. 画面終了時に以下のメッセージが表示された場合は、[はい] ボタンをクリックします。



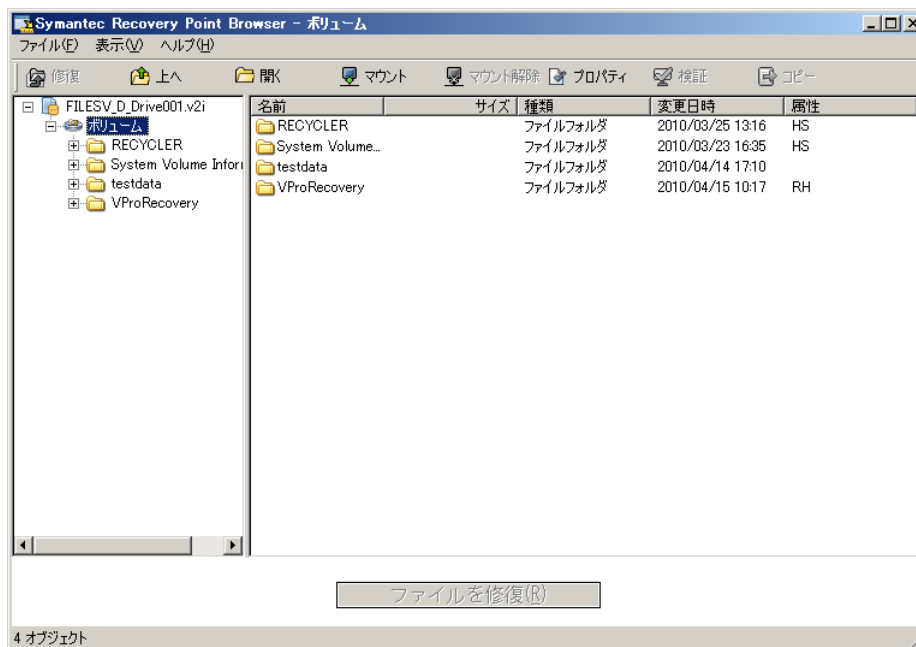
以上で、復元は完了となります。

◆ ファイルの復旧方法（リカバリポイントブラウザ）

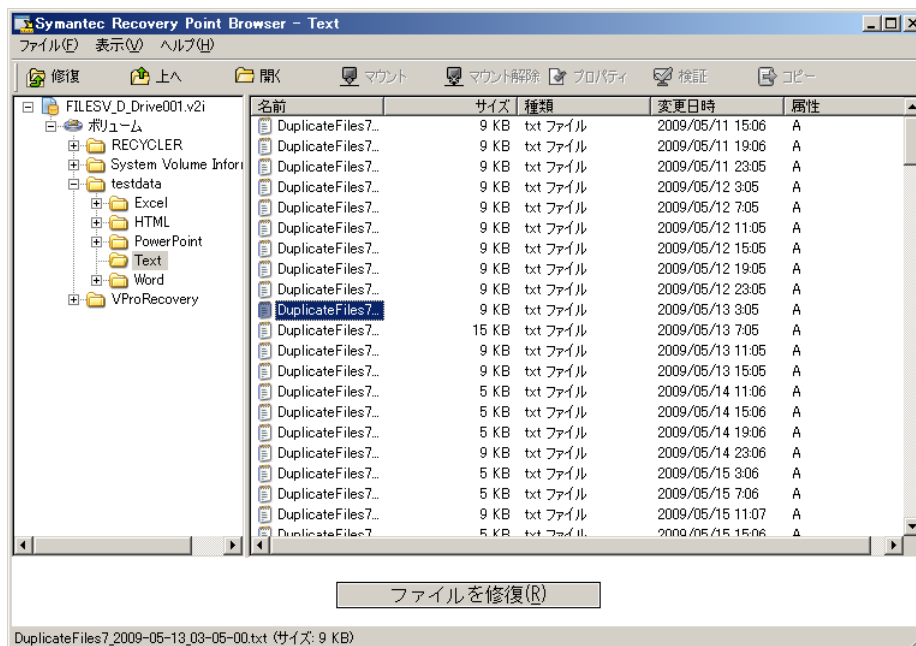
1. [スタート] → [すべてのプログラム] → [Symantec Backup Exec System Recovery] → [Recovery Point Browser] を起動します。
2. [リカバリポイントを選択] 画面が表示されますので、[リカバリポイントを表示] 項目のプルダウンメニューで [ファイル名] を選択します。[参照] ボタンをクリックして、「¥¥iStorage¥backupdata¥FILESV¥FILESV_D_Drive001.v2i」に保存されているデータドライブのリカバリポイント（FILESV_D_Drive001.v2i）を指定し、[OK] ボタンをクリックします。



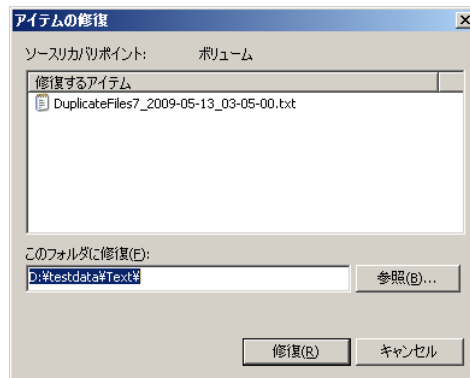
3. 左ペインにツリー構造でシステムドライブのファイルが表示されますので、リストア対象のファイルが格納されたフォルダに移動します。



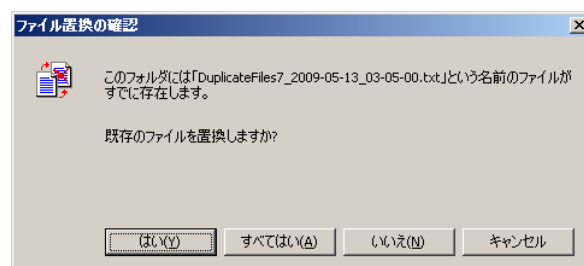
4. リストア対象のファイルを選択し、[ファイルを修復] ボタンをクリックします。



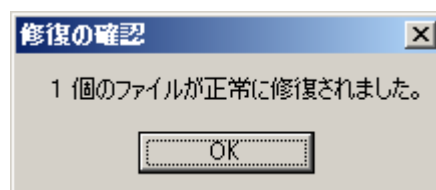
5. 修復されるファイルの格納場所を選択し、[修復] ボタンをクリックします。



6. 以下の画面が表示された場合は、[はい] ボタンをクリックします。



7. [OK] ボタンをクリックします。



以上でリカバリポイントブラウザからの復元は完了となります。

8 注意制限事項

- 英語版のリカバリディスクを使用すると、キーボード配列が英語キーボードの配列になりますのでご注意ください。
- コールドバックアップを行う場合にも、検証済みのリカバリディスクを使用してください。
- Backup Exec System Recovery 2010 をインストール済みの x64 版 OS 環境に、Backup Exec 11、12、2010 をインストールすると、その後 Backup Exec のサービスが開始されません。この場合は、Backup Exec の修復インストールをおこなうか、以下の方法でレジストリを修正してください。

警告：レジストリエディタの誤った使用は、システム全般に渡る重大な問題を引き起こす可能性があります。こうした問題を解決するためには、OS をインストールしなおさなければいけません。NEC では、レジストリエディタを使用することによって引き起こされた障害の解決については、一切保証しておりません。レジストリエディタを使用する場合には、お客様の責任において使用してください。

1. レジストリエディタを起動します。
2. 以下の場所に移動します。
HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\SYMANTEC
3. メニューバーの[編集] > [アクセス許可] を実行します。
4. 詳細設定タブをクリックし、[所有者] のタブに移動して、[このアイテムの現在の所有者] が **Administrators** になっていることを確認します。なっていない場合は、[所有者の変更] にて **Administrators** をクリックし、[サブコンテナとオブジェクトの所有者を置き換える] にチェックをいれて[OK] ボタンをクリックします。
5. [アクセス許可] タブにて、**SYSTEM** と **Administrators** にフルコントロールの権限を付与します。
6. レジストリエディタを終了します。

- Backup Exec System Recovery 8.5 から、Backup Exec System Recovery 2010 へのアップグレードを行うと、その後イベントログに V2i Mount Driver service の開始が失敗した旨のエラーが記録されることがあります。これは、Backup Exec System Recovery 2010 では V2i Mount Driver service を使用しないために記録されるものでシステムの動作に問題はありません。以下の手順によって表示させないようにすることができます。

警告：レジストリエディタの誤った使用は、システム全般に渡る重大な問題を引き起こす可能性があります。こうした問題を解決するためには、OS をインストールしなおさなければいけません。NEC では、レジストリエディタを使用することによって引き起こされた障害の解決については、一切保証しておりません。レジストリエディタを使用する場合には、お客様の責任において使用してください。

1. レジストリエディタを起動します。

2. 以下のキーを削除します。

HKEY_LOCAL_MACHINE¥SYSTEM¥CurrentControlSet¥Services¥v2imount

3. システムを再起動します。

- Windows Server 2008 を使用している場合、複数のメディアに分割作成したリカバリポイントからのリストアが正しく実行できないことがあります。この場合は、メディア内のリカバリポイントを一度ハードディスク上などにすべてコピーし、コピーしたリカバリポイントを指定してリストアを行ってください。
- リカバリポイントからファイル単位のリストアを行う際に、「リカバリポイント（リカバリポイントの格納場所）をマウントできません。」というエラーが発生する場合があります。この場合は、Backup Exec System Recovery 2010 を SP1(9.0.1)にアップデートしてください。アップデートは、インターネットに接続可能な環境では LiveUpdate 機能を用いて行うことができます。ユーザズガイド 第2章 の「Backup Exec System Recovery の更新」を参照してください。インターネット接続不可の場合は、弊社より媒体を送付いたしますので PP・サポート経由にてお問い合わせ願います。

9 FAQ

◆ 増分バックアップが実行中に中断された場合、どのようなになるのですか？

リカバリポイントが正常に作成されず、エラーファイルとなる場合があります。エラーファイルは、統合されず不正ファイルとして残りますが、次のスケジュール時には適切な完全リカバリポイント、あるいは増分リカバリポイントが作成されます。

◆ 複数の世代のバックアップを取る場合、バックアップ中に保存先のハードディスクの空き容量が足りなくなった場合、どう処理されますか？

指定したリカバリポイントセット数に達する前にハードディスクの空き容量が不足すると、定期的リカバリポイント処理が正常に実行できなくなり、現在のリカバリポイントが作成されません。バックアップ開始前に、ハードディスクの空き容量を確認しておく必要があります。

◆ 複数の世代のバックアップを取る場合、指定した世代数に達した後のバックアップはどのように行われますか？

指定した世代数に達した場合は、その次のバックアップではまず最新のリカバリポイントが作成されて保存された後に、以前に作成した最も古いリカバリポイントもしくはリカバリポイントセットが削除されます。

指定した数よりも 1 つ多いリカバリポイントを保存できるだけのハードディスクの空き容量が必要です。

◆ リカバリポイントの作成中に、ファイルが更新された場合、そのファイルはバックアップされますか？

Backup Exec System Recovery 2010 のバックアップ中にファイルが更新された場合は、更新前の状態で正しくバックアップが行われます。

10 障害時の問い合わせ方法

障害についてお問い合わせ頂く際は、障害の内容に関係なく、以下の情報を添えて、PP・サポートサービスへ問い合わせてください。

- ・ 障害の発生日/時刻
- ・ 障害の内容
- ・ 障害による影響度

障害の発生により、どのような影響が発生しているかをご連絡ください。（システムの運用に支障があるかなど）

- ・ 障害が発生したきっかけ

パッチの適用やシステムの設定変更など、障害の発生前に実施した何らかの操作があればご連絡ください。

- ・ 障害が発生した際の手順/操作

詳しい手順をお知らせください。また、障害発生 の時間帯に動作していた他の処理があった場合はその処理についてもご連絡ください。

- ・ 再現性/発生頻度

今回の障害が一度だけ発生したものか、何度か再現しているものかをご連絡ください。

- ・ 環境

障害が発生した環境は、テスト環境なのかすでに運用中の環境かをご連絡ください。

- ・ 製品のバージョン

Backup Exec System Recovery の GUI を起動し、[ヘルプ] - [バージョン情報] をクリックして確認してください。

- ・ 他にインストールされているソフトウェア

該当マシン上で他にソフトウェアを導入している場合は、ご連絡ください。

- ・ HW 情報

バックアップを行っている該当マシン

バックアップデータを保存しているサーバー（ネットワーク上の共有フォルダにバックアップを行っている場合）

について、機種名/OS（適用 SP）をご連絡ください。

- ・ 周辺機器情報

周辺機器を接続している場合は、ご連絡ください。

- ・ その他（特殊事情）

上記以外に、気になる事がございましたらご連絡ください。

- SeaST ログ

OS上のBackup Exec System Recoveryで発生した障害の場合は、本書第 10.1 章「[SeaSTログ採取方法](#)」の手順に従ってSeaSTログを採取してください。リカバリディスクにより起動した環境で発生した障害の場合は、本書第 10.2 章「[リカバリディスク起動時のSeaSTログ採取方法](#)」の手順に従ってSeaSTログを採取してください。

なお、SeaST ログはシステム内に存在する現時点までのログを収集しますので、収集にあたって事前の準備は不要です。

10.1 SeaSTログ採取方法

障害が発生したコンピュータにて、以下の手順で SeaST ログを採取してください。

◆ SeaST ログの採取方法

※本ログの採取では、システムの再起動は発生いたしません。

1. エクスプローラを起動します。
2. メニューバーの [ツール] → [フォルダオプション] をクリックし、[表示] タブの [すべてのファイルとフォルダを表示する] がチェックされていない場合はチェックして [OK] ボタンをクリックします。

※OS によってはフォルダオプションの変更の方法が異なる場合もございます。この場合は、ご利用の OS にあった方法で変更してください。

3. 以下のフォルダが存在する場合は削除します。

Windows Vista 、 Windows 7 、 Windows Server 2008、 Windows Server 2008 R2 の場合

C:¥Users¥All Users¥Symantec¥Backup Exec System Recovery¥Support

上記以外の OS の場合

C:¥Documents and Settings¥All Users¥Application Data¥Symantec¥Backup Exec System Recovery¥Support

4. 以下のフォルダを開きます。なお、手順内のフォルダのパスは、Backup Exec System Recovery をデフォルトでインストールした場合のものとなります。インストールフォルダを変更されている場合は、その配下をご確認下さい。

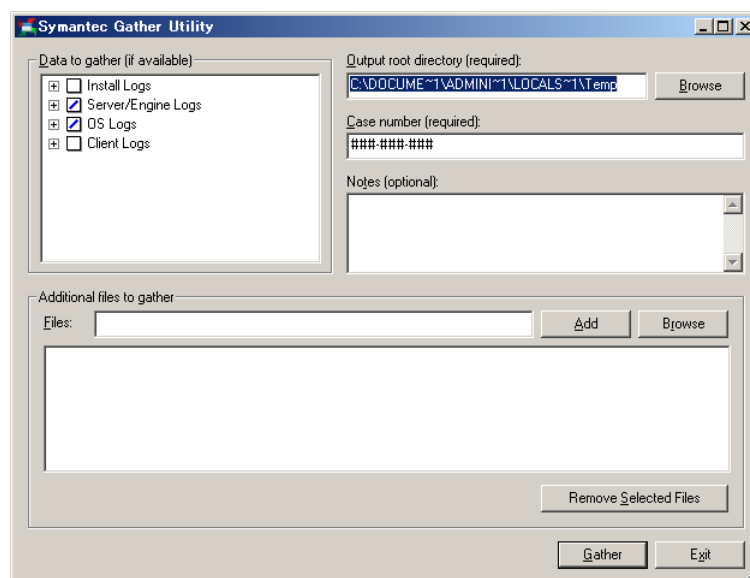
C:¥Program Files¥Symantec¥Backup Exec System Recovery

※ご利用の OS が x64 版の場合は、フォルダのパス中の「¥Program Files」を「¥Program Files(x86)」と読み替えてください。

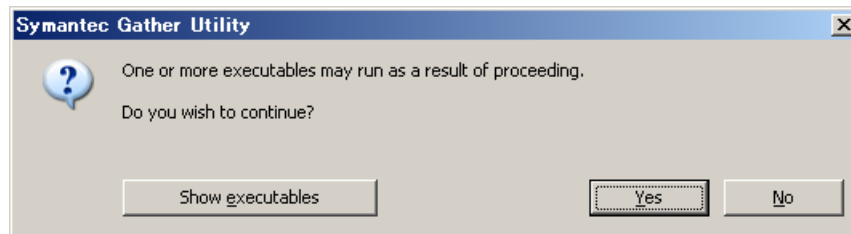
5. フォルダ内に「¥Support」フォルダが存在していた場合は「¥Support」フォルダを削除します。
6. 「¥Utility」フォルダを開きます。
7. フォルダ内の「SeaST.exe」をダブルクリックで実行します。
8. [サポートツール] 画面が表示されますので、[テクニカルサポート情報の収集] をクリックします。



9. [Symantec Gather Utility] 画面が起動しますので、[Output root directory] にログの出力先となるパスを、[Case number] に "000-000-000" を入力し、[Gather] ボタンをクリックします。

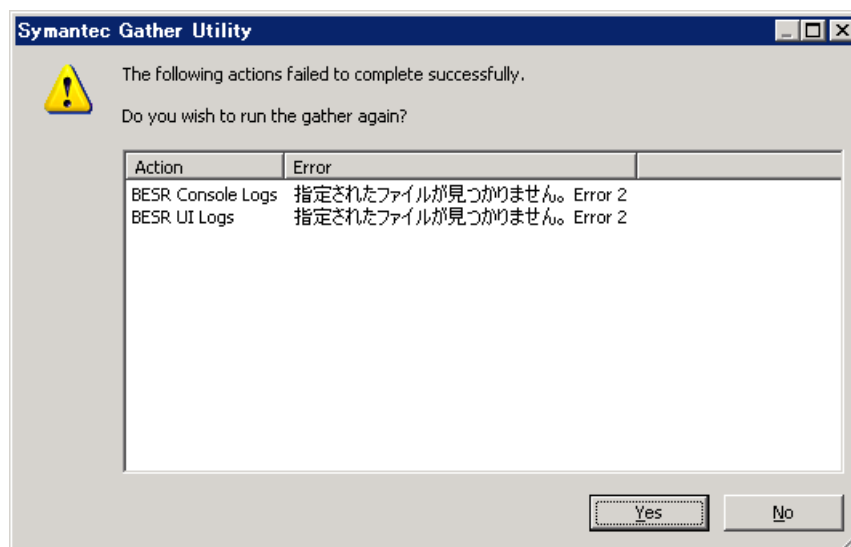


10. 以下の画面が表示された場合は、[Yes] ボタンをクリックします。

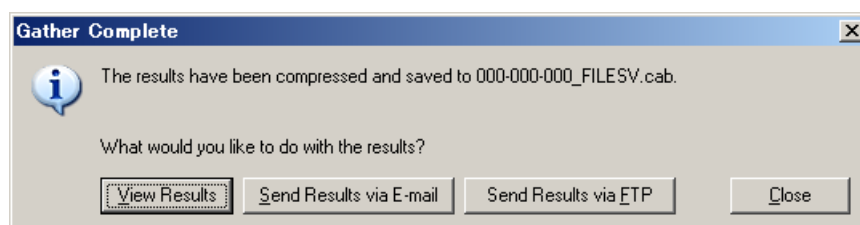


11. 情報収集が完了するまで数分間待ちます。

12. 以下のような画面が表示された場合は、[No] ボタンをクリックします。



13. 完了のメッセージが表示されますので、[Close] ボタンをクリックします。



14. 項番 9.で指定した場所に「¥000-000-000_<コンピュータ名>」フォルダが作成されますので、そのフォルダ配下の「¥BESRDiagnostics」フォルダに格納されている「system.nfo」ファイルのサイズを確認します。このファイルのサイズが 0 バイトの場合はそのまましばらく待ちます。サイズが 0 バイトでなくなった事を確認し、「¥000-000-000_<コンピュータ名>」フォルダごとログを採取します。
15. [Symantec Gather Utility] 画面の [Exit] ボタンをクリックして終了します。
16. [サポートツール] 画面の右上の×をクリックして終了します。

以上で、SeaST ログの採取は終了となります。

10.2 リカバリディスク起動時のSeaSTログ採取方法

リカバリディスクにより起動した環境で障害が発生した場合は、以下の手順で SeaST ログを採取してください。

障害発生後にシステムの再起動を行うと、ログが消去されてしまいますので SeaST ログの採取は必ず再起動の前に行ってください。

◆ リカバリディスク起動時の SeaST ログの採取方法

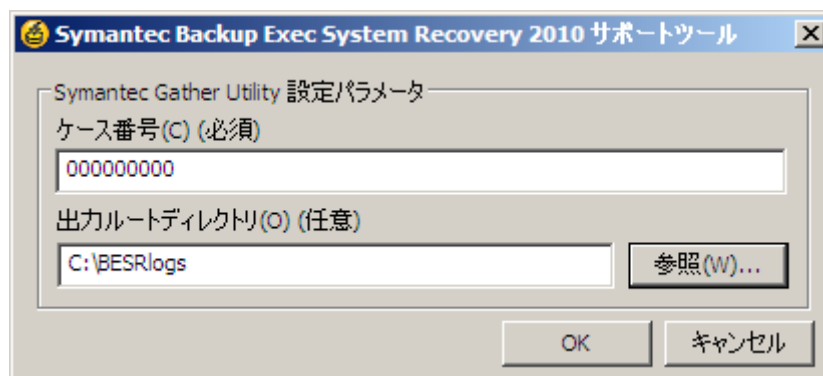
1. [Symantec Recovery Disk] 画面にて、[ユーティリティ] → [サポートツールの実行] を選択します。



2. [サポートツール] 画面にて、[テクニカルサポート情報の収集] をクリックします。



3. [ケース番号] に "000000000" を、[出力ルートディレクトリ] にログの出力先となるパスを入力し、[OK] ボタンをクリックします。



+++ 補足 +++

デフォルトではログの保存先に X ドライブが表示されていますが、X ドライブのデータは再起動により消えてしまいますので、保存先に他のドライブを選択するか、もしくは採取したデータを再起動前にネットワーク共有フォルダなどに移動させてください。

4. 情報収集が完了すると、項番 3.で指定した場所に「¥000000000_<ランダム文字列>」フォルダが作成されますので、このフォルダごと採取します。
5. [サポートツール] 画面の右上の×をクリックして終了します。

以上で、SeaST ログの採取は終了となります。